赤い花

月乃宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤い花

【Ｎコード】
Ｎ８７１９Ｖ

【作者名】
月乃宮

【あらすじ】
残酷・冷血非道で知られるザールレック国王に捕らえられ、王宮に閉じ込められた村娘テア。逃げ出そうとするも、かなわない……いつまでこんな生活が続くのだろうか。

（1）

厳しい冬が終わった。
辺りが光と喜びに包まれ、それは広大な国土全土を満たしていく。
城下町から徒歩で一日半かかる郊外の田園では、農夫達がそれぞれの畑へ赴き、持ちこたえた苗床に感謝の祈りを捧げていた。その間も黄金色の朝日が、黄色く茂った草木の頭をやさしくなでていく。
「わあ、やったやった！　これで今年の春は満開になるよ！」
「テア、ちゃんとお祈りしなさい」
テアと呼ばれた少女は朝日の中、ここらでは珍しい赤銅色髪を揺らして口をとがらせた。
「だって、あたしが初めてひとりで育てたお花だもん。声に出して叫びたいよ、ありがとーって！　アマリアおばさんも分かるでしょ、あたしの気持ち」
「……テアったら」
毒気を抜かれたように笑い出すアマリアは、恰幅のいい体を揺らしながら少々乱暴にテアの頭をグリグリとなでた。テアは照れたように細い腕を自らの体に巻きつけ、ぎゅっと自分自身を抱きしめる。
「あー、早く夏にならないかなぁ！　きっと一面に真っ赤な花が咲くよ。収穫時にはいっぱい種を摘んで、いっぱいいっぱいオイルを作るんだから」
「あんたは気が早すぎるよ。やっとこさ冬の風が過ぎたばかりじゃないか。収穫の秋までには、まだまだ嵐の季節や雨季だって乗り越

えなくちゃならないんだよ？　テオドールの栽培はそんな甘いもんじゃないんだ」
「わかってますよーだ」

小さく舌を出しながらも、テアの顔はいっそう輝きを増していた。

まだ十五になったばかりのテアには両親がいない。
テアが十歳の時に事故でいっぺんに亡くなってしまったのだ。そんなテアが、唯一の遠縁であるアマリアのもとで暮らすようになって、早五年の歳月が流れようとしていた。

もともと人懐こく素直な性格のテアは、西国の街育ちだったにもかかわらず、ここザールレック王国の田舎暮らしにすぐさま順応した。体を動かすことは楽しいし、何より美しい田園風景はテアの心を魅了し、なぐさめた。

早朝に家々を包み込む幻想的な霧も、日中辺りを眩しく照らして草花を色濃く鮮やかに描き出す太陽も、空全体をトロリとした紫や赤のグラデーションに塗りこめる夕焼けも、暗闇に瞬く満天の星屑(ほしくず)も、テアの目には何もかも奇蹟のように美しい光景として映った。

そんな自然界の現象の中でも、とりわけテアの心をつかんだのがこの地方でしか咲かないとされるテオドールの花だった。

夏の夕暮れ時に咲き誇るテオドールの赤い花弁が揺れる姿は、何にも増して壮大かつロマンティックな光景だ。静けさの中に立ちこめる炎のように赤くゆらめくテオドールの花弁は、まるで人々の心の奥底に潜む情熱を表しているかのようだ。人一倍感受性が強いテアは、テオドールの花を見るたびに心を熱くゆさぶられるのだった。

「あれは……何？」

朝の祈りがようやく終えようとする頃、気がつくと周囲の人々がいっせいに同じ方角を見ていて、テアも何事かと皆の視線をたどる。視線の先には衛兵付きの豪華な馬車が一台、路肩に停まっているのが見えた。

テアの隣でアマリアが小さく眉を寄せる。

「貴族の馬車に違いない。きっとお忍びの帰りだよ……やだね、こんな朝方まで。普通は暗い内に帰るもんなのに」

「お忍び……」

「ああ、あんたはまだ小さいから知らなくていいよ」

「おばさん！　あたし、もう十五だよ？」

「あ、そうか。でも成人まで、まだ三年もあるだろう。第一あんたみたいなチビ助に、どこの殿方が通うってんだい？　色恋話ができるようになるのは、もうちっと先だね」

「ふん、そんなのあたしだって興味ない……あっ！」

テアは突然、目の前の光景に顔を強張らせた。

なんと馬車から出てきた人物が、テアの丹精込めて育てた畑に飛び込んだのだ。

しかもその人物は、傍若無人にも畑の中をズカズカ歩き回っている。

「こ、こ、こらー！！」

気がつくとテアは大声をあげて走り出していた。

畑の中にある小道を抜け、ようやくその人物のいる辺りまでたど

り着くと、もう一度大声で叫んだ。

「こらー！　何してんの、人んちの畑で！！」

テオドールの茎の丈はとても高く、ゆうにテアの身長を超えているためか、奥にいる人物の姿をすっかり覆い隠している。しかしテアの声に、畑の侵入者はガサガサ音を立てながら近づいてきた。

やがて姿を現したのは、見たことも無いぐらい優雅で豪華そうな衣装を身にまとった男だった。

「……なんだ、子供か」

開口一番にそう言われ、テアはびっくりしてまじまじと男の顔を見つめた。

まるで彫刻のように均整取れた美しく端正な顔には、氷のように冷たく光る水色の瞳が際立っている。日の光を反射して青く輝く長い髪がサラサラと水面のさざなみのように揺れ、テオドールの黄金色の葉と見事なコントラストを織り成していた。

神々しい凄みさえ感じる光景に一瞬ひるんだテアだが、ぐっと足を地に踏みしめて前に進み出る。

「ひ、非常識です。ここ、あたしの畑なんです。一生懸命育てているんです。今畑に入ると、まだ土になじんでいない苗が駄目になっちゃうんです……だから早く、畑から出て！」

男は悪びれた様子もなく、しかし素直に畑から出ると、あらためてテアの顔をのぞきこんできた。

テアより頭ひとつ分はゆうに高いその男は、冷ややかな口調で切

り出した。

「俺に命令するとは、いい度胸だな」

「め、命令じゃないもん……お願いだもの」

「しかも口ごたえまでする」

そう言って、男はテアの腕を乱暴につかみ上げた。

口元には冷笑を浮かび、水色の瞳は氷のように温かみを感じられない。

「面白い子供だな、お前」

「こ、子供じゃありませんっ！　はなして！」

そのまま男に引きずられるようにして、テアは馬車の後部座席へ放り込まれた。

後から続いて乗り込んできた男を、テアは真っ青な顔で見つめる。

「お、降ろして！　ゆ、誘拐、ひとさらいっ！　降ろしなさいってば！！」

その時、扉の向こうから衛兵らしき人物が駆けつけてきた。

男は扉越しにちらりと衛兵を見やる。

「王宮へ戻る。馬車を出せ」

「かしこまりました、陛下」

その会話にテアは固まった…王宮？　しかも陛下だって？

この目の前の人物が、まさか……と、テアは今度は恐怖で口が聞けなくなってしまった。

「ん？　どうした、さっきまでの威勢は。急に大人しくなったな」
「あ、あ、あの、あのっ……あたし……」
「心配しろ、なにも取って食おうっていうんじゃない。子供は趣味じゃないんでな」

ガラガラと無機質な音をたてる馬車のなかで、テアは目の前が真っ暗になった。
そしてこの瞬間から、テアの王宮に閉じ込められる日々が始まったのだった。

国王が絶大なる権力を握るザールレック王国は、それでも国内は驚くほど平和だった。
決められた制度の中で、身分相応の暮らしをしているかぎり問題なく生きていける……だが少しでも上に盾突こうものならば、恐ろしい処罰が待っていた。

あらゆる権限・律法が国王に帰するゆえ、人々はその存在に対し畏怖の念を抱いていた。一部の貴族や王族を除き、一般市民が王の姿を拝見できる機会はほとんどなく、雲の上の存在としてきっぱりと線引きがされていた。

なにより国王の残虐・冷酷非道さは、国内に飽き足らず諸外国でも有名だ。

少しでも命令に背けば厳しく罰せられる。
国王の刃にかかった者は数知れず、しかも対象は性別年齢関係な

かった。それ故、特に王宮近隣の街や村で罪を犯す者は極端に少なく、皮肉なことにもそれが国土全体の秩序と平和をもたらしているのだった。

そのような恐ろしい国王に連れられて、王宮の奥まった一室にテアが押し込められ早三日。

宮殿に到着した日に侍女らに引き渡されて以来、王とは一度も顔を合わせていない。

どんな気まぐれだか知らないが、いつ何時気が変わって切り捨てられるのか、この三日間というものテアは生きた心地がしなかった。

室内・外には常に数人の侍女が控えており、プライバシーも全く存在しない。

一挙一動人の目にさらされている上、いつ殺されるか分からない恐怖に怯えるあまり、当然テアの食は細くなる一方で、睡眠もほとんど取れてなかった。

「あの、少し一人にさせてくれない？」

「……」

「じゃあ、何か話そう？　ね、誰かこっちきて……」

「……」

テアが何を言っても、侍女たちは困惑した様子でただただ顔を伏せるばかり。

どうやら王に命令されたこと以外は、何も行なわないよう言いつけられているらしい。

何より、彼ら自身がテアの輪をかけて萎縮（いしゅく）している……こんなところからも、主の絶対的な力を見せ付けられる。

四日目の朝になり、同じ時刻に扉がノックされる。
朝食の時間は毎日決められた通り、食べられもしない量の皿をワゴン車に乗せて給仕の女がやってくるのだった。

ただ今日がいつもと違ったのは、給仕の様子がいつもよりオドオドしているのだ……その理由は、後方から現れた人物で明白だった。

「……痩せたな。顔色も悪い」
「お、王様」

ベッドのかたわらに寝間着姿のまま硬直して立つテアは、ずかずかとやってきた国王に腕を取られて息を飲んだ。腰が引けたように、後ろへよろめく。

「骨と皮じゃないか。なぜ食事をしない？」
「い、い、いただいて……ます」
「嘘を言うな！　ほとんど手付かずだと給仕から聞いている……なにが気に入らないんだ」

大声で怒鳴るように言われ、テアはびくっと体を揺らして足を崩しかけた。
がっちりとつかまれた腕のおかげで倒れることはまぬれたが、全体重が腕にかかって嫌な痛みが肩が走り、テアは顔をしかめた。

（2）

引きずられるようにして用意されたテーブルに無理矢理着かされたテアは、向かい合わせにドサリと腰を下ろす王の一連の動作をぼんやり見つめていた。テーブルから少し斜めに座った王は、長い足をスラリと組むと、近くに控えていた給仕に差し出されたグラスに指を伸ばす。

「どうした、さっさと食べろ」

グラスを口に運びながら、にらむように見つめる王の視線をさけつつ、テアは震える指でスプーンを取り上げた。皿に乗せられた料理をすくおうとしたが、何度くりかえしてもスプーンから料理がこぼれおちてしまう。

――どうしよう……なんで王様はここに来たの？　もしかして、とうとう見切りをつけにきたのかも……このままじゃ、食事が終わる前に殺されるかもしれない。

テアはカタカタと体を震わせながら、それでも懸命にスプーンを動かそうとして……それがとうとう手から滑り落ちてしまった。グラスをテーブルにたたきつける音がし、テアは目をつぶって椅子の背もたれに体を引いた。

「何をしている！」

「ご、ごめんなさ……」

「まったく世話の焼ける……ほら、口を開けろ」

思いがけず近くで声がしたのでテアがおそるおそる目を開くと、

目の前にスプーンを手にした王がテーブルから身を乗り出すようにしていた。

テアは口元に差し出されたスプーンの存在に気づいたが、恐怖心でいっぱいなため何を意味するのが理解できない。目を見開いたまま、呆然とスプーンの先を見つめているテアに、王は焦れたように立ち上がってテアのすぐ隣に回った。

「口を開けろ、と言ってる」

「……いやっ！」

片手で乱暴に顎をつかまれ、むりやり口をこじ開けられるとスプーンを突っ込まれた。テアは涙目で王を見上げ、王は眉を寄せたままテアの顔を見下ろす。

「……そんな目で俺を見るな」

テアは涙をこぼしながら首を振ると、大きな手が顎から外れる。それと同時にガシャン、と鋭い音が室内に響いた。

テアが床に視線を落とすと、投げ出されたスプーンが転がっているのが目に飛び込んだ。

「全部食べるまでテーブルを立つことはゆるさん。お前ら、見張っていろ！」

最後の言葉は侍女たちに向けて言い放たれ、王は長衣の裾をバサリとひるがえしながら部屋を出て行ってしまった。取り残されたテアは、我慢できずに嗚咽（おえつ）をもらす。

「うっ……うっく、ひっくひっく……うう、うええん……」

いつものように、周囲の侍女たちは誰一人反応を示そうとしない。しかし、しばらくすると扉の向こうから一人の女性が現れた。

「どうか泣き止んで下さいまし……お嬢様」

テアの両手がやさしくつかまれ、そっと顔から外される。

「ほら、そんなに強くこすると腫れてしまいますよ」

そこにいたのは年配のやさしそうな面立ちの女性で、ひざまずいた状態でテアの顔をのぞきこんでいた。テアはしゃくりあげながら、不思議な気持ちで女性を見つめる……四日目にして、初めて誰かにまともに声をかけられたのだ。

「あなた、誰？」

「私はお嬢様のお世話をさせていただきます、ロッシーヌと申します。お嬢様のお名前をうかがってよろしいでしょうか」

「……テア」

「テア様、ですか。確か古代語で『大地』という意味の？」

「……はい……母がつけてくれたんです」

「素敵な名前ですね」

ひとりぼっちの孤独感をかみしめていたテアは、ロッシーヌのやさしい言葉に新しい涙を流す。

ロッシーヌは綺麗なハンカチを取り出すと、その涙をぬぐってくれた。

「どうか泣かないで下さいまし……陛下もご心配されているのです

から」
「えぇっ、嘘！」
思わず言ってしまった言葉に、テアは赤くなって口を閉じる。
そんなテアに、ロッシーヌはなだめるような微笑を浮かべる。
「先ほどのお食事中、お部屋の外で控えさせていただきましたの。わたくしは長年こちらにお仕えしておりますが、あんな風に甲斐甲斐しく世話を焼かれる陛下を拝見するのは初めてですわ」
ロッシーヌの言葉にテアは口をつぐむ。乱暴に食卓へ引きずっていき、にらむように食事の様子をながめ、あまつさえ口の中にスプーンを突っ込んだと思ったら、今度はそれを床に放り投げる……これのどこが『甲斐甲斐しく世話を焼かれる』になるのか、テアにははなはだ疑問だった。
「元気を出して下さいまし。きっと悪いようにはなりませんわ」
「……そう、でしょうか……？」
「さあさ、食事がすみましたら今宵のためのドレスをお見立てしましょうね。きっと他の皆様も驚かれることでしょう」
「ド、ドレス？　一体なんの話しですか？」
「宴があるのですよ。陛下はテア様にもご出席されるよう、ご所望しておられます」
テアはあっけにとられた。宴？　ドレス？　なんで私が……飽きたら殺されるかもしれない、と怯えて時を過ごしていたテアだったが、まさか宴などという人の目にさらされる場所へ呼ばれるとは思ってもみなかった。
「や、やだ……宴なんて、出たくないです」

「陛下のご命令です。拒否は出来ませんわ」
「なんとかなりませんか！？」
「なりません」

テアが食い下がってみたものの、ロッシーヌは先ほどまでのおだやかな表情から一変して厳しい様子をみせる。その有無を言わさぬ態度から、王の恐ろしさを垣間見る思いだった。

一体どうして、王はテアを宴席などへ呼ぶのだろう？
楽団の魅惑的な踊り子でも、美しい調べを奏でる楽師でもないテアは、人を楽しませる特技なんぞこれっぽっちもないのに。

『もしかしたら』と、テアの心は暗く沈む……『皆の前で笑いものにされた挙句、なぶり殺しにされるのかもしれないわ』残虐非道な噂が絶えない、血塗られたイメージが色濃い王宮内の宴席だからこそ、そんな悪趣味で最悪のシナリオまで浮かんでしまう。

再び襲ってきた恐怖で顔色を失くすテアとは裏腹に、ロッシーヌは実に楽しげな様子で室内に運び込まれた多くのドレスをテアのために見立て始めた。

髪飾りに扇子、ビーズや刺繍が織り込まれた絹張りの靴に至るまで、たっぷり時間をかけて厳選している様子だ……どうしてそんな、ただの村娘に？と、テアの不信感はさらに増した。

宴の会場となる大広間へ案内されたテアは、使いの者に指示され

るまま室内の片隅に置かれた椅子に腰を下ろした。後ろには部屋からついてきた侍女が三名ほど控えており、そんなテアは人々の好奇の視線にさらされている。

室内には様々な扮装をした人々が大勢いたが、音はささやくような声しか聞こえてこない。

よく見ると皆、壁から何層か連なって整列しており、奥の中央にある玉座の主を待ち構えているようだ。

テアは居心地悪そうに手元の扇子をいじっていたが、ふと顔を上げると国王が礼服のマントをひるがえして玉座に座ろうとしているところだった。

「皆の者、くつろいで宴を楽しむがいい」

アーチ型の高い天井に反響するような国王の声が響き、ようやく室内にざわめきともつかぬ話し声や笑い声が響きだした。

――何をするにも、王様の指示を待ってからなのね。

テアは小さくため息をつき、人々の視線を避けるようにしてさらに部屋の隅へと移動しようと立ち上がったその時……テアの身が凍るような声が大きく響いた。

「皆の者、見よ。あれが先日、私がつかまえてきた農家の娘だ」

ざわりと声がわき立ち、広間中の人々の視線がテアに向けられた。

テアは青ざめたままその場に立ちつくし、玉座の人物を見つめた。

国王の顔は意地悪い微笑を浮かべていたが、それにもかかわらず

威厳と気品を少しも損なっていなかった……その端正な美貌さえも。

「また、ずいぶんと若い娘ですな」

玉座のかたわらに立つ、やけに強面の老人が静かな口調でそう述べると、それをきっかけに広間のあちこちから小さなざわめきが聞こえてきた。

やがて国王が玉座の台から降りて人ごみに紛れると、人々の関心はようやくテアからそれて周囲は宴らしく賑やかな雰囲気に包まれた。

テアはほっとして再び部屋の隅へと歩きだすと、途中で誰かの腕に制される形で行く手を阻まれた。顔を上げると、そこには恰幅（かっぷく）の良い中年の男が立っていた。

「王宮の宴に出席するのは初めてですかな？」

男は丁寧な口調で、そっとテアにささやく。

テアはとまどいながらも、小さくうなずいた。

「陛下の気まぐれにも困ったものですな。あなたはどのくらい、もつことやら」

男の意味深な言葉に、テアは警戒するように身をすくませる。

すると男は突然テアの腕を取ると、力任せに体を引き寄せた。

「陛下が飽きられた娘は、我々貴族に下げ渡されるのですよ……もし欲しい者が現れない時は、商人に引き取られることもありましてね、国外へ売り飛ばされることも多々あるそうです。いかがかな、もしよければ私が引き取ってやってもよいのだが？」

男の恐ろしい文句に、テアの全身は雷に打たれたような衝撃が走った。

（3）

人身売買の噂は耳にしたことがあったが、まさか自分がその対象になるとは思ってもみなかった。国外に売り飛ばされる娘は、大抵奴隷のような扱いを受け、その末路は非常に過酷で屈辱的な辱めを受けると言われる。

だからって貴族の慰み者になるのも真っ平だった。

いずれにせよ、死んでしまった方がましなのかもしれない……テアが絶望感で目の前が真っ暗になったその時だった。

「何をしている。それは私の所有物だ」

おそろしく低い声が後方から響き、同時に腕をつかんでいた男の体が「ぎゃあ！」と鋭い悲鳴と共にその場に崩れ落ちた。

振り返ると、そこには恐ろしい形相をした国王が立っていた。

その腕には、鞘におさめられたままの剣が握られている。

「宴を血で汚したくないからな……命拾いしたと思え」

床に崩れ落ちた男は、うつ伏せに倒れ伏したままピクリとも動かない。

すぐに衛兵達が駆けつけ、その男は担がれるようにして広間から運び出された。

驚いたことにテアの周囲の人々は、たった今起こったことに気づかなかったかのように、まるで気に留める様子がない。

テア自身はこの状況についていけず、全身を震わせて今にも倒れ

そうだったが、足が崩れる前に国王の手にがっしりと腕をつかまれて引っ張られた。

「ついて来い」

「……やっ……は、はなして……」

半泣きのまま引きずれるようにして、テアは広間に面している中庭へと連れ出された。

背の高い国王の背中が黒い壁のように恐ろしく、またつかまれた腕がギリギリと締め上げられて、テアはあえぐような声を漏らす。

人工的に敷き詰められた石畳の縁が、歩く度にテアの靴先に引っかかり転びそうになった。

周囲はほとんど暗闇に包まれており、目の前も横も何も視界に映らない……テアは知らぬうちに目をつぶっていたみたいだった。

「きゃあ！」

衝撃と共に、刺すような冷たさが全身をどっぷりと包み込む。

水しぶきが顔中にかかり、開きかけた目にしみた。

「汚らわしい、あんな男に……」

「あ、ああ……」

浮き上がった顔を沈めるように、国王の腕が首に伸びて押し込まれた。

テアの全身が再び水中に沈められ、口の中へ大量の水が流れ込んだ。

それから唐突に水から引き上げられたテアは、大量の水を吐き出

しながら、支えられる腕にしがみついて激しく咳き込んだ。
「お前は私の物だ。今後一切、他の男が触れるのは許さん」
苦しくて涙がこぼれる状態の中、耳元にぞくりとするような冷たい声が響く。
そこで……テアの意識は完全に途切れた。

テアは夢を見た……黄金色の畑を歩く夢。
口ずさむのは昔、母親から習った子守唄。
遠く懐かしい記憶。
つなぐ手はあたたかく、いつくしむように頬をなでる指先がやさしかった。
いつまでもこうしていたい、ずっとここにいたい……そんな場所だった。

目が覚めると、テアは見慣れないベッドに寝かされていた。
全身がこわばったように動かず、また鉛のように重かった。
次の瞬間、テアの頭の中で記憶の波が怒涛(どとう)のように押し寄せ、全身からじっとりと冷や汗が流れ出すのを感じた。

――あ、あたし……殺されかけたんだ……。

音もなく涙が流れだし、頬をつたって枕が吸い取っていく。
口から嗚咽が少しずつ漏れ出すと、部屋のどこかからカタリ、と椅子を引くような音が聞こえた。

「泣いているのか」

思いがけず近くから声が聞こえ、テアは激しい感情の起伏にあえぐように胸を上下させて浅く、不規則な呼吸を繰り返した。視界いっぱいに広がるベッドの天蓋は黒く、まるで夜の波に飲み込まれるかのようだ……目の端に映る視界から、どうやら夜はまだ明けてないらしいことが分かった。

「苦しいのか」
「……う……うう……」
「どこが苦しい？」

伸ばされた指先がテアの額に触れる刹那、テアははっとして大きく身じろぎをした。

「血……血の臭いがする」

その言葉に国王は伸ばしかけた手をスッと引くと、ベッドのかたわらに立ったまま、凍るような眼差しで横たわるテアを見下ろした。青黒く光る一筋の髪が、国王の怜悧な顔を横切ってユラリと揺れた。

「……ここに来る前、囚人の処分を行なってきた。返り血を浴びたのだろう」

酷薄な唇から漏れた低い声に、テアの目が大きく見開く。重い体が自然にズルリと後方へずれ、押し付けられた枕がテアの首に鈍い痛みを走らせた。

「驚くことではない。死刑執行は国王自らの手で行なう。これは先代からの習慣だ」

「……」

「ただし私の代からは、罪人にも剣を持たせることにしている。つまり私と戦って倒せたら、刑をまぬがれるチャンスがある、というわけだ」

国王はそこで言葉を切ると、ゆっくりと屈みこむ様にしてテアに覆いかぶさった。

国王の額から零れ落ちた、濡れたような光沢を持つ髪がひと束、テアの胸の上をかすめる。その隙間から見える赤い色に、テアの瞳が大きくなった。

「頬に、血が……」

テアは早くなる鼓動に突き動かされるように、反射的に国王へ指先を伸ばす。

「……さわるな、これは穢れた血だ」

テアの震える指先が乱暴につかまれ、そのままグッとにぎりしめられた。国王の手は冷たく、氷のようだった。

「この血は、死に物狂いで向かってくる罪人の血だ……私の手で殺した」

「な、なぜ、殺すの……？」

「死刑囚だからだ。たとえ私が殺さなくても、誰かが殺す役目を負うだろう」

テアはつかまれた指から伝わってくる冷えた温度に身震いし、手を引こうと試みたがそれは果たされなかった。テアの瞳から再び涙がこぼれだす。

「逃げたいか、この宮殿から」

「うっ……うう……」

「ならばお前も、私と戦ってみるか？　お前は罪人ではないから私を倒すまでもない。私に一太刀でも浴びさせることができたら、ここから出してやろう……どうだ」

握りしめる力が強くなり、テアの指先が押しつぶされそうになる……テアは懸命に首を振りながら、ボロボロと新しい涙をこぼした。

「私が恐ろしいか」

「……」

「違うと言うのか。ならばその涙の理由はなんだ」

国王の顔が、涙で濡れるテアの顔に近づいてくる。

その涙を吸い取るように、国王の唇がテアの頬をかすめ、それと同時にテアの背中に戦慄が走り抜けた。

「……お、うさま……？」

「私を殺してみるといい……お前にそれが、できるのならば」

テアの胸は張り裂けそうだった。

間近で見る国王の双眼は、深く暗い闇が横たわっていた……まる

で底なしの沼に映る自分の姿を眺めるように、テアは青黒くにごった瞳の中の自分自身を絶望的に見つめていた。

（4）

いつの間にか気を失うように眠っていたらしい。
テアが再び目を覚ました時には、国王の姿がなかった。

代わりに数人の侍女が部屋の隅に控えており、テアが起きたことに気がつくと、その内の一人がしずしずと近づいてきた。

「ロッシーヌさん……」
「テア様、お着がえをご用意しますわ。それから、お食事はすぐ召し上がられますか」
「ここは、どこなの……？」
「陛下の寝室ですわ」

テアは驚いて体を起こした。その途端、体の節々がきしむように悲鳴を上げる。
思わずうめくようにベッドへ倒れ伏すと、ロッシーヌがいたわるようにテアの肩をそっとなでた。

「何か上に羽織るものを持ってこさせましょう。今日はベッドから起き上がらないほうがいいみたいですわね……テア様？」
「……もう、いやだ……」

テアは枕に突っ伏すと、くぐもった声で絶望的につぶやいた。

「あたしは一体いつ、殺されるの？」
「テア様、そのようなことは……」
「だって王様は人を殺すのよ。昨夜だって人を殺したって言ってた……あたしもいつか、王様に殺されるんでしょう！？」

激しく食ってかかるテアに、ロッシーヌは複雑は表情を浮かべたまま首を振るばかりで、何も答えようとしなかった。

やがてテアは「ひとりにして」と、再び枕に顔をうずめる。

すると意外なことに、テアの言った通りにロッシーヌを含む侍女たちが部屋を下がっていく気配がした。テアが顔を上げた時には、そこにはすでに誰も残っていなかった。

王宮に連れてこられて以来、初めて一人きりになることができたテアは、今までこらえていた感情が涙と共にあふれてくるのを感じた。

――昨日からあたし、ずいぶん泣いているわ……もしかしたら一生分、泣いちゃったかもしれない。

今度の涙は不思議なことに、流れるたびに心の中のくすぶった感情が外に出て行くかのようだった。しばらく泣くと妙に体の芯がすっきりして、次第に冷静さを取り戻していく。

――ここから逃げ出さなくては。

このままでは、確実に自分の身に不幸なことが起こる……ことによると殺されてしまうのかもしれないのだ。

テアはそろそろとベッドから這い出ると、細長くくりぬかれた、床から天井近くまで続くアーチ状の窓に手をかけた。そっと開くと、外を流れる爽やかな風がサッ、と室内を一掃していく。

おそらく扉の外には見張りがいるだろう。

テアは窓辺から身を乗り出すようにして庭を見下ろした。眼下に広がる庭園は不規則な形を連ねており、色とりどりの草花は絡み合うように複雑な色彩を織り成している……足場は悪そうだが、この高さならなんとか飛び降りれそうだ。

思い切って窓から飛び降りたら、着地の時にひざをついて少しすりむいてしまった。

テアは地上から、たった今飛び降りたばかりの窓を見上げた。『降りることは出来ても、上るのは無理そうだな』……抜けだしたことに、なぜか後ろめたさを感じつつも、テアは庭の奥へと歩を進めた。

庭は複雑に入り組んでおり、不思議と懐かしい気持ちにさせられる。

要塞のような宮殿に閉じ込められていたテアは、まるで遠い田舎に訪れたような錯覚を覚えて嬉しさがこみ上げてきた。

背の高い樹木や腰までとどく潅木(かんぼく)をかき分けて進むと、やがて小さな花々が絨毯のように広がる一面の花畑にたどりついた。

その花畑のすみっこで、茶色のローブを身にまとった男が熱心に庭仕事している。テアの気配に気がついたその男は、日よけのフードを頭から外しながらゆっくりと顔を上げた。

「いい天気だね。散歩？」

「あ、はい……」

「ちょうど今、ひと休みしようと思っていたところなんだ」
男は花畑の隣に立つ樹木の木陰に移動すると、テアに向かって優しくうなずく。テアは自然と引き寄せられるように木陰に入ると、頭上に広がる緑の屋根をふりあおいだ。
「……大きな木」
「うん、この庭では一番年寄りかな。庭が出来る前から、この辺りの主だからね」
「主？」
「今はこの庭の主人、ってとこ。さ、どうぞ」
さりげなく差し出されたカップに、テアは一瞬きょとんとする。手に取ると、中にはとろりとした金色の液体が入っていた。
「これは何？」
「キリュの木のシロップだよ。さらさらしてて飲みやすいんだ」
「へえ……」
さわさわと頭上の葉がやさしい音を奏でる。
テアは静かに座り込むと、目の前にいる男の姿を改めてながめた。
くすんだ灰褐色の長い髪は襟足できれいにまとめられ、柔らかそうな質感をしている。線の細い顔立ちはおっとりと柔らかく、綺麗に澄んだ茶色の瞳をしていた……この地方じゃ見かけない顔立ちだ。
「この庭は、あなたが世話してるの？」
「うん、国王様に許可をいただいてね」
「むこうにある庭と、ずいぶん違うのね」

テアの部屋から見える庭はシンメトリーに整備された極めて人工的なものだ。だが目の前に広がる光景は、テアが幼いころどこかで見た風景を思い起こさせる。

「私、この庭好きだわ」

「ありがとう。僕は西の都の出身なんだけど、祖父の代から庭師をしているんだ。僕の故郷で庭というと大体こんな風だよ」

「あたし小さい頃に西の都へ行ったことあるわ。そっか、だからこのお庭を見たとき懐かしい感じがしたのね」

「ところで君は、国王様の新しい恋人？」

急に話題を変えられて、テアはあわてたように首を振った。

「ちがうわ、突然ここへ連れてこられただけ。ついこの前まで、都の南の外れにある畑で暮らしていたのよ」

「ここへ連れてこられたって、国王様に？」

「ええ、無理矢理馬車に乗せられて、この宮殿に閉じ込められたわ」

テアはつかの間忘れていた自分の境遇を思い出し、泣きそうな気分でうなだれた。

「このままだとあたし、王様に殺されちゃうかもしれない……」

「まさか！」

「じゃあ、どうしてあたしをここに連れてきたの？　様子を見て、そのうち殺されちゃうんだわ……昨日だって人を、こ、殺したって、王様が言ってた」

テアは手にしたカップを両手でにぎりしめ、唇をふるわせる。

「顔に血がついてたの……罪人の返り血だって。触ったら駄目だ、

穢れている血だって……あたし、王様がこわい」

静かな沈黙が二人の間に落ちた。

テアの耳元で、風の音がなでるように走り抜けていく。やがてテアの隣から、静かな声が聞こえてきた。

「君は殺されたりしないよ」

テアは振り返って男の柔和な顔を見つめた。

「そのつもりなら、とっくに殺されているよ。あの方は一度決めたことは、時間を置かずに行動に移されるからね」

「……なんで、そんなこと分かるの」

「だって僕の住んでいた村だって、あっという間に焼かれたんだから」

「……え……」

ふたつの影がうつる緑の芝の上に、庭師の憂いを帯びた視線が落とされた。

（5）

「二年前に西の都で戦争があったのを覚えている？　僕の村は、その都の外れにあったんだ。村人のほとんどは追われるように村を出ていってしまったけど、僕だけはその場に残ったんだ……祖父の代から続く庭があったから」

静かな独白をする男の横顔を、テアは瞬きも忘れてじっと見つめた。

「戦争はすぐに終わった。それから一週間も経たないうちに、敵地の被害を視察しにやってきた国王様にお会いして……それで、この宮殿へ連れてこられた」

「あなたも無理矢理連れてこられたの？　あたしみたいに？」

「ううん、国王様は僕を王宮の庭師として雇いたい、とおっしゃられたんだよ」

テアは信じられない、という風に頭をふった。

「いやじゃなかったの、そんな敵国の王様の宮殿に行くなんて」

「とまどいはなかった、といえば嘘になるよ。でもたったひとりの家族だった祖父にも先立たれ、身よりもなかったし、村は壊滅状態だったから……祖父の遺してくれた庭を後にすることだけは心残りだったけどね」

男は草をはらうように立ち上がると、ローブのフードを再び被りなおしてテアに向き直った。

「さてと、僕はもう少しやらなくちゃならない仕事があるんだ。君

はもう、宮殿へ戻ったほうがいいよ。帰り道を教えてあげる」
「でも、あたし……あんな場所へ戻りたくなんかない！」

テアは勢い良く立ち上がった。

「逃げ出さなくちゃって……だからあたし、王様のいない間にこっそり抜け出してきたんです。どこか外へ出る抜け道を知りませんか？」
「逃げるなんて無理だよ、きっと。そもそも僕はそんな道知らないし」

テアはガクリ、と再びその場にしゃがみこんだ。

「そんなにこの宮殿にいるのは嫌？」
「当たり前でしょ、こんな場所……」
「じゃあ聞くけど、国王様も『こんな場所』にいたいと思う？」
「え……」

男の目が優しくテアの顔をのぞきこんだ。

「国王様はとても強い方だけど、それは同時に、とても孤独な方ってことなんだよ」
「孤独……」
「僕はこの庭が、少しでも国王様のお慰めになればいいと思っている。君が国王様の恋人になれなくても、せめてそばにいる間は友達になってさしあげたら？」

――友達！？　じょうだんじゃない、あんな……。

テアの脳裏に国王の冷たい瞳がよみがえる。

しかし同時に、あの瞳の奥に見えた、深くて暗い闇も思い出す……国王も、この場所が好きじゃないのだろうか？　テアは戸惑いの気持ちを無視できないまま、力なく首を振った。

「……無理よ、そんなこと」

「簡単なことだよ。話しかけて、笑いかけてみればいい……僕にしたように」

「……無理よ、笑うなんて、そんなの無理」

テアを見つめる男の口元がほころんだ。

「きっと国王様も喜ばれるよ」

テアはもう一度無理、と言おうとしたが、優しい微笑をたたえた茶色の瞳に見つめられて、なんだか口に出来きなくなってしまった。

「じゃあ、ここから道なりに行くといい。宮殿の前に出ることができる」

テアは黙ってうなずくと、神妙な様子で指し示された道を歩き出す。

ふと足を止めて、後ろを振り返った。

「そういえば、あなたの名前、聞いてなかった」

「ヴァレン」

「あたしはテア……またね、ヴァレン」

テアは暮れ行く日差しの中、あきらめたようにトボトボと歩きだした。

前方に宮殿の入り口が見えてきた頃、テアは足を止めて空を仰ぎ見た。空に溶け出した赤い光が、テアの全身を包み込むように照らしている。

「随分と長い散歩だったな。気が済んだか」

「王様……」

黒い影を引きずった国王がテアの前に現れた。

国王は長いマントをうっとうしそうに肩へ押しやると、夕焼けを背にするテアの正面に立って腕組みをした。

「今度勝手に抜け出したら、鎖をつけて部屋に閉じ込めてやる」

テアはすうっと心が冷えていく思いがした。

「あたしの体を鎖で縛りつけたかったら、そうすればいい……でも心はいつだって外へ出られるもの」

国王の眉間のシワが深くなり、夕日の赤を映した青い双眸が、暗く不気味な紫色を帯びる。テアは自分の強気な発言に、自分自身が驚いていた……まだこんなことを言える力が残っていたとは。

「……心がある無いなぞ、どうでもいいことだ。そんなこと最初から期待してない」

テアの握りしめた両手が力強く引き寄せられる……つかまれた両

手首はひねり上げられるようにして、国王の顔の前に持ち上げられた。

「細い手首だな。片手で折れそうだ」
「痛っ……」
「俺を前にして、へつらわない女はお前が初めてだ。だが私に逆らったら、ただじゃ済まない」

国王が手を突き放すと、テアはよろけてその場にくずれ落ちる。
ひざを折ってテアをのぞきこむ国王の瞳には黒い影が落ちた……その奥底にひそむ、哀しいまでに暗い色を見てしまったような気がして、テアは思わず視線をそらした。

孤独な方、とヴァレンが言っていた……この、胸がざわつくような気持ちは何だろう。
テアは同情なんかしない、と強く自分に言い聞かせた。しかし……。

「あの……」
「なんだ」
「名前……王様の名前って、何て言うんですか」

国王の青い瞳が一瞬ゆらいだように見えた。

「セルジュ、だ」
「セルジュ……『樹木』って意味の？」
「そうだ」
「あたしの名前、テアって言うんです。意味は……」
「『大地』だろう。古代イトセリア語の」

テアは瞳を大きくして、身を起こした。
すると今度は、大きな手がさしだされた。
「ここは冷える……早く中へ」
意外な言葉に、テアの戸惑いはますます強くなっていく。ぼんやりとしていたら、あっという間に抱きあげられてしまった。抱き上げる両腕は鋼のように強く、拘束するような強引さがあった。まるでもう、逃がさないと言わんばかりの……。

（1）

テアが王宮に連れて来られてから二週間が過ぎた。
『宮殿』という籠の中に閉じ込められた、奇妙で単調な生活。

でも次第にこの生活に順応し始めている自分に気付いたテアは顔をしかめた。
初めはあんなに嫌がっていたのに、慣れとはおそろしい……いつものように差し向かいで国王と朝食をとりながら、テアは小さくため息を漏らした。

国王はこうして毎日テアと朝食の席に着く。
ザールレック国王として国務に追われ、どんなに忙しい時でも、その習慣だけは欠かすことはなかった。

「あの……」
「なんだ」

テアはパンを持つ自分の手を見下ろしたまま、こわごわ言葉を続けた。

「昨日ロッシーヌさんから、花の種をもらったんです……南の地方に咲くマイラっていう青い花の」

正式にテア付きの侍女となったロッシーヌは南方の出身だそうで、以前里帰りした際のお土産にと花の種をテアに分けてくれたのだ。

宮殿へ連れてこられるまで、テアはこの地方でも有名な赤い花を咲かせるテオドールの栽培をしていた。それを知ったロッシーヌが

『植物の世話ぐらいなら陛下もきっとお許し下さいますよ』と提案したのだ。
なんせテアは外へ出ることはほとんど許されておらず、外部の人間と接触する機会もほぼ皆無である。ロッシーヌの提案は、そんなテアを気遣ってのことだろう。

「熱い地方の植物だから、温室で栽培しなくちゃいけないって言われて……その……」

テアの言葉は次第に尻すぼみに小さくなっていく。
セルジュは飲み物のグラスを手にしたまま、明後日の方向を向いたままだ。その威圧的な空気に、テアの勇気はみるみるうちにしぼんでしまう。

何度も顔を合わせているのに、いまだに抜けない緊張感。怒らせると恐ろしい人物だってことは、百も承知である。今だって、目の前にある皿をすべて平らげないことには、一体どんな無体なことをされるか分かったものじゃない。

一度『食欲がない』といって食事を辞退しようとしたことがあった。
すると不機嫌になったセルジュによって無理やりテーブルにつかされ、吐き出すまで強制的に食べさせられたことがあった。あんな思いは二度としたくないと、テアは心底思っている。

やがて国王の手にしたグラスがテーブルに置かれた。

「好きにしろ」
「……え」

テアが顔をあげると、セルジュの視線がまともにぶつかった。その冴えるような美貌にはいつまで経っても慣れず、上に立つ者に相応しい眼力の強さにうろたえてしまう。

「北側の庭に温室がある。ヴァレンに案内させるといい」

「あ……はい」

そう言い残し、セルジュは部屋を後にした。

今朝もやっぱり、飲み物以外は口にしなかった……セルジュの席に残された飲みかけのグラスに、テアはそっとため息をつく。

――あたしと一緒じゃ、食欲もわかないのかしら。

セルジュが食べ物を口にしているところをテアは一度も見たことがなかった。強引にそばに置いているくせに、なにかを警戒しているかのようだ……心を許してないのは確かだ。

それでも食事の席を共にするとは、いったいどういうことなのだろう？　テアには国王の態度がさっぱり理解できなかった。

「こっちの温室はあまり使われてなくてね」

昼食の後、テアは庭師ヴァレンの案内で宮殿の北側に位置する庭にやってきていた。

北の温室は少し寂れていたが、独特の趣があった。灰色の練り大理石の柱が四方を囲み、厚手の硝子（ガラス）が斜めに連なってはめ込まれて

いる。

「プランターがあるから、そこに種をまこう……たしか裏口にいくつか出しておいたはずだから」

温められた室内を歩きながら、ヴァレンは時おり植物の様子を確認したり、余分な葉や雑草のようなものを抜いたりしている。テアはそんな様子を興味深くながめていた。

やがて温室の奥までたどり着くと、そこには外へと通じる裏口があった。

外へ出ると、前方の木々の間から宮殿の一角が顔をのぞかせる。

「ヴァレン、あの建物はなに？」

「北の塔だよ」

テアが改めて塔を振り仰ぐと、窓から誰かがこちらを眺めているのが見て取れた。

「あれは誰かしら？」

「ああ……ミゲール様だよ。北の塔で文官を務めてらっしゃる」

目をこらすと、ミゲールは窓辺に頬杖をついた格好でテア達を見下ろしているようだ。

少し距離があるので表情まではっきりと見えないが、なんとなく微笑んでいるようである。

ミゲールは頬杖をついてない方の手をあげて、なにやら合図を送るような動きをする。それが『後ろを見ろ』という意味だと気づいたテアは、振り返って「あ」と声をもらした。

「どうかした？」
「あれ……」
二人の後方には背の高い樹木が連なり、その間からは真っ白な花畑が垣間見える。
ヴァレンはちょっと微妙な表情を浮かべた。
「レーサの花畑……というには放置状態かな。野草の一種だから世話もしてないんだ」
「そうなの」
「勝手に伸び放題だよ。処理するには、地表に網目状に張り巡らされた根を燃やしてしまわないといけないんだ。花壇にとってはやっかいな雑草だよ」
「へえ、綺麗なのにね」
そこでテアはふと、ミゲールが見ていたのはテア達ではなく、後ろの花畑だったことに気がついた。
やがて種まきを終え、プランターを温室へ運んでいる間も、ミゲールは頬杖をついたまま出窓にもたれていた。

それから二日後。
昼食後テアはひとり北の温室にやってきた。
テアは許可をもらわないと、たとえ庭とはいえ宮殿の建物内から外へ出してもらえない。

それはセルジュが決めたことらしく、侍女のロッシーヌもかたくなに言いつけを守ってテアを気軽に歩かせたりしないのだ。

――いつまでこんな生活が続くのかな……。

温室内を徘徊(はいかい)しながら、テアはそんな風にぼやく。

今日だって、ほんの一刻という条件で温室へ来ることを許されたのだ。テアは見えない足枷をはめられているようなものだった。

ふと、テアは温室の裏手に広がる白いレーサの花畑を思い出した。まだ時間が許すので行ってみようと裏口の扉をでると、そこには意外な人物が立っていた。

「こんにちは、良いお天気ですね」

「あ……あなたは」

「はじめまして、俺はミゲール・バルカンと申します。あなたは陛下の……お客さん、ですよね？　テアさんとか」

愛想良く話すミゲールに、テアは内心驚いていた。

それというのも宮殿内ではロッシーヌとヴァレンを除き、テアに話しかける人間はほとんどいなかったからだ。

ミゲールが身付けている青い長衣は、おそらく文官の制服だろう。肩上で切りそろえられた黒い髪をかすかに揺らし、物憂げにテアを見下ろしている。その口元は笑っているが、黒く落ち着いた瞳はどこか冷めた印象だった。

「今日も白い花は美しいですよ。テアさんもご覧になりますか」

「ええ、そのつもりで来たんです」

「こちらですよ」と、ミゲールは温室の裏手に広がる林の奥へとテアをいざなう。無秩序に植えられた古めかしい大木の間を縫って、二人は花畑に足を踏み入れた。微風がさやさやと白い花を揺らしている。

「きれいですね」
「ええ、無垢で本当に美しい。あの人の心のままに」
「あの人？」
「サルージャ様ですよ、陛下の実の兄君の」

テアは隣に立つミゲールを凝視した。

「サルージャ様とは、幼少の頃よく一緒に遊んだものです。だから彼が亡くなった時、とても悲しかった」
「亡くなったって、なぜ？」
「生きることを許されなかったからですよ。だからこの場所で、眠るように息を引き取られた……この花々は彼への弔いなのです」
「弔い……」
「陛下から、サルージャ様へのね」

ミゲールはテアに向き直ると、細く骨ばった指先を伸ばし、テアの肩をおおう髪をひと房すくい上げてみせた。

「ふふ、あの時の花のようだ……」

その暗い口調に、テアの体は無意識にこわばった。

「テオドールの花はご存知ですか？　この花畑はもともとサルージャ様が大好きだったあの赤い花で埋め尽くされていたんです……でもサルージャ様が亡くなって、陛下はテオドールを燃やしてしまわ

れた。あなたの髪を見ていると、あの時炎に包まれて燃え上がった赤銅色の花を思い出すんです」

秘密を告げるようなミゲールの声音に、テアは身震いを覚えて後ずさる。

髪はすべるようにミゲールの手から流れ落ちた。

「陛下は一体どういうおつもりで、あなたをお傍に置かれるのでしょうね」

「そんなの、あたしも知らないわ……」

「あなたの緋色の髪……見ているだけでお辛いでしょうに。罪の意識が騒ぐでしょうね」

ミゲールの言葉が終わらないうちに、気がつくとテアはその場を逃げ出すように走り出していた。

（2）

その夜、テアはなかなか寝付けなかった。
なぜなら昼間に聞いたミゲールの意味深な言葉が、頭にこびりついて離れようとしないのだ。

静まり返った室内が突如、扉を開く音であっさりと破られた。
思わず息をのんだテアは、ベッドのシーツ越しにこっそりと近づいてくる人物を見やる。

――王様……？

セルジュはテアのベッドに近づいた。

「眠れぬのか」

テアはおずおずとシーツから顔をのぞかせ、月明かりを背にしたセルジュの姿を見つめた。
長く垂らした髪が月光を鈍く反射して、青い光を帯びている。表情はいつもに増して、凍るような冷たさをたたえていた。

「昼間、ミゲールに会ったそうだな」
「……はい」
「何を言われた」
「……」
「答えろ」

テアはためらいがちに切り出した。

「王様の、亡くなったお兄さんのことです……」
「それから？」
「そ、それから……どうして王様は、あたしをお傍に置くのかって」
「どうして、だと？」

セルジュは乱暴にテアの顎をとらえた。

「それを知ってどうする」
「わ、わかりません」

テアはおびえた瞳で国王を見返した。

「お前はどうなんだ。訳を知りたいのか」
「訳というか……り、理由、というか」
「理由？」
「そ、その、あたしがここに居る理由です……」

至近距離に近づいた端正な顔に、テアの鼓動が一層早くなる。

「ここに居るには、理由がなくては駄目か。ならば望み通り与えてやろう」
「え……」

そのまま、吐息まで奪うような口付けを仕掛けられる。
驚いたテアが声を上げようと口を開くと、スルリと温かい舌が差し込まれた。

「ん……ぁっ、やっ……」

背中に回された力強い腕が、ギシギシとテアの体を締めつけてい

く。やさしさの欠片も感じない行為に、テアの体は指先まで冷えていった。

舌が痺れて感覚が無くなる頃、ようやく離された唇からは荒い息しか発することができなかった。テアが涙目でセルジュを見上げると、冷たい親指の腹が唇に押し付けられる。

「俺の慰み者になる、という理由はどうだ」

「……！」

「そんなに嫌そうな顔するぐらいなら、面倒なことをきくな」

テアはくやしさと恐怖に口元を震わせながら、国王の背中を見送る。けっきょくその夜は明け方まで寝付けなかった。

翌日テアは目覚めると、見なれない部屋で寝かされている自分に気づいた。

国王の部屋でないことは確かだ。国王の部屋が、こんなに質素なわけない……ここはまるで、どこか田舎の農家にある小さな寝室のようだった。清潔感はあるが、白い漆喰の壁は飾り気がなく、床板は使い込まれて飴色に輝いている。

――掃除が行き届いているんだわ。

テアはふわりと笑った……しあわせな夢だと思った。

自分はきっと、叔母アマリアが住むテオドール畑にある小さな家

へ戻ってきたのだ。その扉の向こうから「いつまで寝てるの、朝食が済んだら畑に出るわよ」というアマリアの懐かしい声が今にも聞こえてきそうだった。

しかし……遠慮のないノックの後、開かれた扉の向こうに立っていたのは見慣れない女官だった。

「あなたに制服が届いています。それに着替えて、廊下の右奥にある小ホールにおいでなさい」

「あの……？」

「あなたの名前は何ですか」

若いが化粧っ気の無い、固い表情の女官につけつけと問われ、テアはその迫力に押されながら小さく「テア」と一言返した。

「ではテア、早く着替えなさい。仕事は山ほどありますから」

「仕事、ですか？」

「ええ。あなたは今日からここ、地下二階の厨房と洗濯室で働いてもらいます」

それだけ言うと、女官はさっさと扉を閉めて立ち去った。

ベッドに呆然と座りこんだテアの耳には、扉をはさんだ廊下からカツカツと遠ざかっていく足音が聞こえる。

――あたし、ここで働くことになったの！？

古ぼけた丸い木のテーブルに置かれた服を手に取ると、確かにそれは下働きの女中が着そうなワンピースとエプロンが一式そろっていた。テアはとりあえず言われた通り着替えを済ませると、急いで小ホールへと向かった。

小ホールにはすでに数人の若い女が集まっていた。皆一様にテアを物珍しそうに眺めている。テアも同様に、自分と同じ服を着た女たちを見返した。

「新入りのテアです」

先ほどの女官が、女たちに対して短くテアを紹介する。女たちは終始無言だった。

やがて女官が今日の仕事内容を簡単に指示すると、女たちは黙って自分の配置へと散開する。テアは厨房の床磨きを命じられた。

「そこが終わったらイリスに言って、洗濯室へ案内してもらいなさい」

「……はい」

イリスと呼ばれた女は、テアをちらりと見ると小さく微笑んでくれた。

テアは今日初めて向けられた好意的な表情に、思わず胸がじん、としてしまう。

床磨きは辛い作業だった。

まず氷のように冷たい水で何度も雑巾を絞らなくてならない。そして石畳の床は恐ろしいほど冷えており、膝をつくと体中の体温が奪われそうだった。テアはイリスと一緒に手分けして厨房の床を磨いた。

「私はシンクのまわりの床をふくから、あんたはコンロのまわりをお願い。そっちの方が炭や薪の灰で汚れがひどいけれど、その分まだ床が温かいわ」

イリスはにっこり笑うと、さっさとシンクの床をふき始める。
テアもイリスにならって床をふき始めた。イリスはそんなテアの様子をながめて「そうそう、その調子」と励ますように声をかけつつ、自分の手もせわしなく動かす。

「ねえ、あんたどこから来たの？」
「え」
「あたしは東のユア村からよ。ザールレックの城下町は気候がいいって聞いてたけど、こんな穴ぐらで働いてたんじゃ、そんなの全然関係ないわよね」

どうやらイリスは話好きらしい。慣れない場所にひとり放り出されて不安だったテアは、そんなイリスの気の置けない態度に感謝した。

「ねえ、ここって厨房と洗濯室の他に何があるの？」
「あとはあたしたち地下二階で働く女中の寝室と、それから食堂ぐらいよ。お風呂とトイレは共同だけど、東側と西側にひとつずつあるから、時間さえうまくずらせばたいして混み合わないわ」
「そう……ここには何人くらいが働いているの？」
「十四人よ。意外と少ないでしょ？　あんた入れてちょうど十五人ね。コックは料理長合わせて三人で、外から通っているわ。でも特別なイベントの時なんかコックだけで十人ぐらいそろうこともあるのよ」

ちょうど床磨きを終えた頃、コックらしき人物が一人、また一人と現れた。
彼らはテアたちをチラリと見たが、挨拶などしようとせず、まっすぐ調理台へと向かうと食材の下ごしらえに取り掛かる。

「……あいつらにとって、あたしらは空気と同じよ。気取っててむかつくこともあるけど、気にしなければ害はないわ」

こっそりイリスに耳打ちされ、テアは小さくうなずいた。

どうやら上下関係ははっきりしているようだ。

次に洗濯室へ案内されると、そこには年配で小太りの婦人が待ち構えていた。その婦人の監督の下、イリスとテアを入れた合計四人でリネンの洗濯を開始した。

テアの担当は石鹸で洗ったリネンをすすぐ部分だが、熱い湯と水を交互に使っての作業は床磨きよりも重労働だった。

――あたし、このままずっと、この場所でこの仕事をしていくのかしら。

『ここに居る理由がなくては駄目か。ならば望み通り与えてやろう』

昨夜、そう言われて無理やりキスされた。

思い出すだけで身体の芯が震えてくる……テアはくやしさで唇をかんだ。セルジュが望むなら、テアは彼の慰み者にも、下働きの女中としてこき使われるにも、すべては彼の意のままなのだ。

抵抗すらできない無力な自分に、テアは打ちのめされた。

（3）

昼の食事もそこそこにリネンの洗濯を続けていたテアは、やがて時間の感覚が麻痺していくのに気がついた。ここ地下二階には空気を通す通風口以外は窓がなく、日の光も射し込まないのだ。明かりは壁に置かれたランタンの光だけで、厨房も洗濯室も全体的にやや薄暗い。

それでも作業は時間通りに行われ、洗濯室の壁にかかった唯一の時計が八時を指すころ、テアたち下働きは仕事から解放されて各自室に戻るよう言われた。

イリスの「明日も四時起きだから早く寝た方がいいわよ」という忠告が無くても、部屋に戻ってベッドにぐったりと伏せたテアは、骨身に染みた重労働のためしばらく起き上がれそうになかった。

しかし……ものの五分と立たないうちに、小さなノックの音が響いた。

テアは身体を起こせないまま首だけひねって扉を見つめると、それは返事を待たずに開かれた。

そこには今朝テアを迎えにきた女官が立っていた。

「上からのご命令です。ついて来なさい」

「え……」

「早くしなさい」

女官の有無を言わさぬ態度に、反論する体力もなかったテアはのろのろと起き上がる。

そのまま廊下を出て奥へと進み、突き当りの階段を上り始めた。ひとつ階を上がったところで、再び廊下を歩きだす。

やがて小さな物置のような部屋の前までやって来ると女官は足を止め、後ろからついてきたテアに振り返った。

「部屋の中に着替えがあります。それを着たら王宮の広間へ案内するように、と上から指示されてます」

「う、上って……？」

「さあ早く。遅くなったら、私もあなたもどんな罰を受けるか知れません」

最後の一言にサッと青くなったテアは、だんだん事態が飲み込めてきた。

――きっと王様のさしがねだわ……。

繊細な織の薄衣で出来たドレスに着替えながら、テアは暗い気持ちで一杯だった。

王宮の広間は、夜なのにまぶしいほどの明かりが灯っていた。

一日ぶりに地上の建物にやってきたテアは、足元にからまるように波打つ薄絹のドレスに居心地の悪さを覚えつつ案内された広間へ入る。

はたしてそこには予想通り、セルジュの姿があった。

象牙色のビロードを張られたソファーに座るセルジュの両側には、様々な形のカウチや椅子が設置されており、数人の官僚らしき人物らが静かに着席している。彼らが取り囲む長テーブルには、酒瓶の他に軽い料理や果物が並んでいた。

セルジュは目の端でテアの姿を捕らえるとおもむろに立ち上がり、同席していた人々は軽いお辞儀と共に音も無く退出していく。

「……ついてこい」

そう短く言って奥の扉へと進むセルジュに、女官はテアへ目線で促す。仕方なくテアはセルジュの後に続いて扉をくぐった。

しかしその扉に足を踏み入れた途端、後方でバタンと音がして扉が閉ざされた。

思わず扉に駆け寄って手をついたが、外側から鍵をかけられたようで開こうにもびくともしない。

テアは深いため息をつくと、観念して前へ進むことにした。

セルジュの後を追いながら、暗がりの廊下に身を硬くする。

――いったいどこへ連れていくつもりなの……？

廊下は扉で幾重にも仕切られており、しかも分かれ道もあちこちあるため案内なしでは迷うこと必至である。まるで侵入者を阻むような作りである。

それでもしばらく歩いていると、ようやく部屋らしき場所にたどり着いた。

扉が開かれると、まずテアの目に豪奢な天蓋のベッドが飛び込んできた。
続いて奇妙な香のような匂いが鼻につくと、早朝からの労働で肉体的疲労がたまったテアは眩暈すら覚えた。足元がふらつき、毛足の長い絨毯にひざまづいてしまったのは不可抗力だった。

『俺の慰み者になる、という理由はどうだ』

昨夜ささやかれたセルジュの言葉が脳裏をよぎり、思わず両手で身体を抱き締めてしまう。声を発しようとした時、テアは自分の口がうまく動かないことに気がついた。

「う……ぁ……？」

テアは両手でのど元をおさえた。得体の知らない恐怖に全身を震わせた。

「こっちに来い」

むりやり腕をつかまれたテアは、そのままベッドへと引き立てられる。体の震えが一段と酷くなった。

「安心しろ、無理に抱こうとは思わない」
「……」
「反応の悪い女を抱いても面白みに欠けるからな。しばらく横になってろ」

思いの他やさしい手つきで髪をなでられたテアは、静かに見下ろすセルジュの澄んだ瞳を向けられて、自分の気持ちが徐々に落ち着

いていくのを感じていた。

肩口から揺れるように波打つ青い髪が、テアの首元を微かにくすぐる。やがてゆっくりと目を閉じると、テアはいつの間にか深い眠りについていた。

（4）

それからというもの、テアは仕事のあと同じ部屋でセルジュと夜のひとときを過ごすようになった。

毎朝、目が覚めるころには地下二階の小さなベッドに戻されており、それから制服に着替えて厨房に入る。夜になると女官に連れられて、上の別室で着替えをすませ、セルジュの元へと連れていかれる。

セルジュとは必ず広間で落ち合ってから、奥の部屋へと連れていかれた。

いったん部屋にたどりついてしまうと初日同様、テアは身体を動かせなければ口もきけなくなってしまう。どうやら部屋に焚かれた奇妙な香のせいのようだ。

毎回おびえてベッドに横たわるテアだが、セルジュは以前口にした『慰み者』にするためにテアを抱こうとしなかった。

その代わり動けず口もきけないテアをじっと見下ろし、どこか物思いにふける表情で時折頬や髪に触れる。テアは意識が朦朧（もうろう）とする中、セルジュは何事かつぶやいているのを耳にしたが、妙な効能のあるお香のせいでうまく理解できない。

――でも、朝になると体が楽だわ……。

あんなに重労働を強いられているにもかかわらず、翌朝になるとテアはすっきりと目覚め、疲れが取れていることを実感していた。

そんな日々が十日ほど続いたある日のこと。
厨房の床磨きを終え、洗濯室へ向かいながらテアは同僚のイリスとおしゃべりをしていた。イリスは話好きなので、どちらかというとテアがいつも聞き役にまわる。

「昨日あたし、地上階でミゲール様見ちゃった」

ミゲールという名前にテアは一瞬ギクリとする。が、素知らぬふりをした。
イリスは小さく首を振って話を続ける。

「お気の毒よねぇ」
「え、何が？」

そこでイリスはテアの顔をまじまじと見つめた。

「そっか、テアはここに来たばっかだから知らないんだね。ミゲール様って、お城の文官を務めてる方がいらっしゃるのよ。王族の側近みたいなことをされてたの。でも一年前の事件があってから、北の塔の部署勤めに降ろされちゃったのよ」
「降ろされた？」
「まあ左遷みたいなもんね。北の塔って変な古文書がたくさんあって、引退した年寄りの文官が日がな整理整頓に明け暮れてるって話よ」

そういえば以前、庭師のヴァレンに案内されて城の北側にある温室へ行った時、北の塔の窓にミゲールの姿があった。ヴァレンもミゲールのことを『北の文官を務めておられる方』と話していたが、それが左遷だなんてちっとも知らなかった。

それにしても『一年前の事件』とは何のことだろう？
イリスにたずねてみたが「私もそれほど詳しく知らないけど」と断ってから口を開いた。
「陛下の兄君で、サルージャ様って方がいらしてね。でも一年前にお亡くなりになったの。なんでも自殺だったらしいわ」
「自殺！？」
洗濯室の隅でアイロンかけをしながら、イリスの言葉にテアは息を飲んだ。
「自殺なんて、またどうして……」
「王の嫡子が二人以上の場合、決闘して次期国王を決めるのがこの国の習わしなんだけど、サルージャ様はお身体が弱くてね。噂では、とても勝ち目がないと悟ったサルージャ様が、戦う前夜に自ら命を絶たれたとか」
「だからって、何も死ななくてもいいのに！」
「でも実の弟に殺されるよりマシだと思ったんじゃない？　決闘はどちらかが死ぬまで続けなくちゃいけないからね」
テアは驚愕に目を見開いた。
「生き残った者が王位を継ぐのよ」
イリスの言葉が、テアの頭の中で無情に響く。
そして次に、以前ヴァレンに言われた言葉を思い出した。
――じゃあ聞くけど、国王様も『こんな場所』にいたいと思う？
「それでミゲール様だけどね」

イリスの言葉にはっとして、テアは顔を上げた。

「サルージャ様の側近だったのよ。なんでもサルージャ様とは乳兄弟だったって。だからかしら、サルージャ様がお亡くなりになってから、ミゲール様の頭はおかしくなったそうよ」

「頭がおかしくなったって、気が狂ったってこと？」

「そうそう。なんでも現国王の陛下をうらんでらっしゃるみたい……陛下がサルージャ様を殺したんだって、公の場で陛下の誹謗中傷をしたの。でも頭が狂っているからミゲール様はいまだお咎めなしよ。現国王は歴代の王の中でも特に冷血漢だって話だけど、噂ほど無慈悲な方じゃないのかもしれないわね」

テアはなんと言ったらいいか分からないまま、イリスの後に続いて洗濯室へ入ろうとしたその時。

「そこのあんた、ちょっと手を貸してくれ」

廊下へと続くドアから顔を出したのはコックのうちの一人だった。

「野菜が届いたんだ、運ぶの手伝ってくれ」

「あ、はい」

この地下ではコックの指示が絶対で、言いつけられた用事は何よりも優先して行わなければならないのだ。

――他の皆に迷惑かけちゃうな。

洗濯室の役割分担を考えて、テアは心の中でため息をついた。テアが抜けた分、他の皆が協力して穴埋めしなくてはならないのだ。

「この箱を、外に運んでくれ」
「外……あの、外ですか？」
「そう言っているだろう。時間が無いんだ、早くしろ」
テアは信じられない気持ちで、野菜の入った木箱を見下ろした。
――これを運べば、外へ出られる……！
日がな一日、光も差し込まない地下で働きづめのテアは太陽が無性に恋しかった。同僚は交代で休みの日など外出しているようだが、テアには休みも外出も許されてなかった。
それに日に当たらない生活が長く続ければ、自然と体がおかしくなってくる。
夜はぐっすり眠っているものの少しずつ体調は悪くなっていき、最近では食欲もめっきり落ちてしまった。精神的なものもあるのだろう。
――外、外だ……！
テアは重い木箱を抱えながらも、早足で階段を上る。出入り口の古い鉄製の扉を押しあけると、テアの全身に光のシャワーが降り注いだ。
扉の外でテアはしばし放心したように突っ立っていた。
気がつくと涙が頬をつたっており、頬にふれた指先がしっとりと濡れる。喜びで無意識に涙がこぼれていた。
しかし……そこには危険が待ち受けていた。

「……！？」

何者かがテアの背後から忍び寄り、彼女の口をふさぐ……次の瞬間テアは意識を手放した。

（5）

テアは酷い頭痛で覚醒した。
半身を起こすと、奇妙な寝台に寝ていることに気がついた。
「ああ、やっと目覚めたのですね」
「……あ、あなたは！」
視界がはっきりしない、暗がりの中に立っていたのは、薄らと微笑むミゲールだった。
ミゲールは小首を傾げると「少し痩せたようですね」と心配するような素振りをみせる。
「ここ、は……？」
「俺の隠れ家です。ここなら安全ですよ」
「……安全？」
「陛下に見つからないってことです」
フフ、と含み笑いをもらすミゲールに、どこか狂気めいたものを垣間見た気がしたテアは身を震わせた。
「隠れ家って、どこなの……どうしてあたしが……っ！？」
「ああそんな風に急に立ち上がっては危ないですよ。しかもその鎖は、そんなに長くないのですから……」
テアの右足首には鉄製の輪がつけられ、鎖が繋がっていた。
足を動かす度にジャラリ、と硬質な嫌な音が響く。
「ど、どういうことなの……」

「こうすれば俺の目の届かない場所へは行けないでしょう？　何しろあの男のもとにいたら、あなたは殺されてしまいますからね……少し日当たりは悪いでしょうが我慢してください」

その言葉にはっとして周囲を見回した。

部屋には窓がひとつもなかった。

代わりに室内を照らすのは壁に設えられた小さなランプの光だけだ。石造りの粗野な壁に、石畳の床……テアは瞬時に、自分がどこかに閉じこめられたことを悟った。

「出して！　ここから出して！」

「いけません、あの男に見つかってしまう」

ミゲールは幼子をなだめるように、小声でささやいた。

涙目のテアは、足首の鎖をこわごわと指先で触れる。まるで悪夢のような現実に、テアは何度も首を振った。そんなテアを、ミゲールは憐れむように見降ろしていた。

「……ずいぶんと探しましたよ。ここ十日ほど姿が見えなかったので、よもや殺されてしまったのかと生きた心地がしませんでした。まさか地下で暮らしていたとは、ね……コックに金をつかませて、あなたを外へ出すよう言いつけたのですが、うまく連れ出すことが出来てほっとしました」

「つ、連れ出すって……」

「まあ少々薬の量が多すぎたのか、なかなか目が覚めなくてやきもきしましたけれどね」

ミゲールは片手で口を覆いながら、クスクスとおかしそうに笑った。

その話を聞いたテアは、そういえば意識が途切れる前に奇妙な匂いがしたことを思い出した。おそらく薬か何かをかがせられたのだろう。

「なぜ、あたしなの……？」

「なぜ？」

ミゲールは少し悲しそうな表情を浮かべる。

「なぜって、もう同じ過ちを繰り返したくないからですよ。あの時、私は無理矢理でもあなたを連れ出すべきだった。ここに閉じこめて、二度とあの男の目に触れさせなければよかったのです」

「な、何の話をしてるの……？」

「そうすれば、あなたは死ぬことがなかったのに……」

ミゲールはしばらく目を閉じていた。その双眸が再び開らくと、テアの困惑した視線を絡め取った。狂気をはらんだ穏やかな微笑がミゲールの白い顔にゆっくりと広がる。

「でも、もう大丈夫です。ここにいれば誰にも見つからない……もちろん、あの男にも」

まるで本当に気づかうような様子のミゲールに、テアは絶望感を覚えずにいられなかった。いたわるような眼差しが、鎖を撫でる白い手が、心底テアを震え上がらせた……この男は正気じゃない。

「では、俺は仕事に戻りますので」

「ま、待って！」

テアは必至だった。

このまま閉じこめられた状態で放置されたら、次いつこの人に会えるか分からない。

「『同じ過ちを繰り返したくない』ってどういうこと？　過去に何があったの？　王様、いえ……セルジュ国王と何か関係があるの？」

「あの男の名前を言うな！」

ミゲールは感情もあらわに怒鳴ると、テアの上に馬乗りになった。右手でガツッと、音が鳴るように首をつかまれ、そのまま容赦なくギリギリと締めつける。

「なぜ、いつもあの男なんだ……」

「うぐっ……」

「いつもあの男のことばかり気にして……俺はこんなにも、あなたのことを思っているのに……」

ミゲールの手がゆるむ。

テアは咳き込みながら息継ぎを繰り返す。

「あなたのことを、こんなにも思っているのに……サルージャ様」

テアを見下ろす黒い双眸から、涙の雫がひとつ、またひとつとテアの顔に降り注ぐ。

ミゲールの背には高さが見えない暗い天井が広がっているばかりで、それはまるで彼の背負う心の闇の深さが伝わってくるようだった。

――この人はあたしのことを……サルージャと重ねてる？　ううん、サルージャと『思い込んで』いるのだわ……！

完全に狂ってる。

ミゲールは確かに正気じゃなかった。そしてそれは、サルージャが消えた日からすでに始まっていたのだろう。

やがてミゲールの瞳が徐々に大きくなっていった。それと同時に首の戒めも少しずつゆるんでいく。テアは自分の全身から重みが引くのを感じた。

「では、いい子にしていてくださいね……俺は仕事へ行ってきますので」

骨ばった指先がテアの額をそっとなでた。

テアはもう、何も言えなかった。

（6）

ひとり残されたテアはこわごわと指先を自分の首に這わせた。のどは呼吸をするたび、きしむような違和感を覚え、首の皮に触れるとピリリと痛んだ。

かなりの負担を体に強いられたようで、やがてコトリと両手を体の脇に下ろすと、しばらくの間は指一本も動かせそうになかった。視界も霧がかかったようにぼやけ、意識も少し混濁（こんだく）していたようだ。

それからしばらく夢か現（うつつ）かわからない状態が続いたが、時間の経過とともに意識がはっきりしてくるのを感じ、テアはようやく首を横に動かした。

テアの視界に映ったのは、洋服があふれ出している衣装箱にカップや羽ペン、インク壺といった日用品が無秩序に置かれた大きなテーブルだった。そしてその隣には、ごつごつした石の壁に沿って、膨大な量の本が乱雑に積み上げられている。

テアはそろそろと起き出すと、足にからまる鎖に気をつけながら衣装箱に近づいた。

弱々しい明かりの中なのであまりよく見えないが、手触りだけで十分高価な品物だということが分かった。手に取ったシャツは大きく、男性用であることは間違いなかった。

次にテーブルに目をやると、金の装飾が施されたコーヒーカップに気づく。その横には少し汚れた羽ペンとインクつぼ、そして使いかけのレターセットが一式置かれていた。便せんのヘッダーには王室のエンブレムが刻印されている。

――これって、まさか……サルージャとかいう人の……？

テアは改めてぐるりと部屋を見回した……中央に鎮座する一人用のベッドを四方の壁が囲み、窓はひとつもなく、唯一の扉は鉄製だった。おそらく鍵がかかっているだろう。監禁するための独房だということは、疑う余地も無かった。

テアは緩慢な動作で本の積まれた壁へ移動すると、ペタリと石畳の床に座りこんだ。

積み上げられた本を一冊ずつ手に取り、表紙のタイトルをなぞる……大半は詩集で、その他に歴史書が少し、それから神話のような物語が書かれた本が二冊ほどあった。

「……古代イトセリアの神話だわ」

かなり読みこまれたらしく、表紙が擦り切れてしまっている。そっと開くと一部背表紙から外れそうなページもあり、またあちこちと折り目がつけられたり線がひかれたりされていた。パラパラとページを追っていくと、かなり後ろのページに差し掛かったころ奇妙なページを発見した。

――これは……さっきの便せんだわ。

二つ折りにされた便せんは、片側の端がページの余白の部分に貼り付けられていた。おそらくこのページをしっかりと開かないことには、便せんには気づかないだろう……まるで隠すように貼られているようにみえるし、逆に誰かに気づいてもらうために故意にここに貼りつけたようにも見える。

テアは少しばかり後ろめたさを感じつつ、その便せんをそっと外して開いた。それは手書きの小さな文字でびっしりと埋め尽くされていた。
読み進めるうちに、テアの心が緊張で震えてきた……なぜならそれは、サルージャの独白をつづったものだったからだ。

こんな形でここを去る自分を許してほしい。
王になれない事については何も感じない。
物心ついた頃から分かっていた。
自分の一生は、弟の即位と同時に終わるだろうと覚悟していた。

弟の存在をうとましく思わない。
むしろその存在に救われてきた。
この王宮で唯一の私の希望だった。
生まれつき体が弱い自分の代わりに、雄々しくもたくましい弟が国を担っていくのだ。

ただ、弟に対する罪悪感はある。
彼は生まれた瞬間から、つらい運命を背負わされていた。
兄である私をいつの日か殺さなくてはならない。
そんな残酷な運命と向き合って生きてきたのだ。

でも弟なら国を変えることができる。
たとえ私が王座についたとしても、国を変えることはできないだろう。
だが弟は運命を凌駕する力を持っている。
だから私はその思いにこたえなくてはならない。

卑怯な生き方かもしれない。
でも生きてさえいれば、きっと再び会える日がくるだろう……

最後の行に、テアははっと息をのんだ。

――『生きてさえいれば』……？

「……何をしているのです？」

低い声とともに、テアの頭に衝撃が走った。
ガツ、と床に打ちつけられる音を全身で感じ、襲ってきた痛みでテアは自分が殴られたことを悟る。

半分痺れた顔を床から持ち上げると、杖のようなものを手にしたミゲールが見下ろす形で立っている姿が視界にうつった。

「それはサルージャ様の私物です。あなたのような下賤な者が気軽に触れてよいものではありません」
「……」
「大体どうしてあなたがこの部屋にいるのです？　ここはサルージャ様の隠れ家ですよ」
「……！？」

ミゲールはいまいましそうに顔をゆがめると、手にした杖をもう一度振り上げた。

「待って！　私をここへ連れてきたのはあなたよ！？　私はこんな場所にいたくないのに！」

テアはおびえつつも、必死に弁明した。
すると急にミゲールの表情が変化した。振り上げた手をだらん、と落とし、哀しそうに目を伏せる。

「……『こんな場所にいたくない』？　なぜ拒否するのです……俺があなたのためを思って設らえた部屋ですのに。本当にあなたはわがままだ、サルージャ……」

白い顔に、黒い瞳に、狂気の色がはらむ。

「俺はね、あなたに死んでもらいたくないのです。あなたが死んでしまったら、私の生きる意味も死んでしまう。俺はあなただけを思い、あなただけを見つめて今日まで生きてきたのです。今さら俺の目の前から消えるなんて、そんなこと許せない……」

ヌッとのばされた腕の先が、テアののどをしめつける。
まだ記憶に新しい、おぞましい感覚が、テアの恐怖に拍車をかけた。

ギリギリときしむ音が、テアの意識を遠くさせていく……。

「だから俺は……こうするしかなかったのです……」

悲しみに包まれた声音が、テアの意識に深く刻まれた。
霞む視線の先にはミゲールの顔があった……殺されかけているというのに、なぜかテアは彼を哀れに思えてしょうがなかった。

(7)

テアの視界がどんどん狭くなってきたその時、ある衝撃とともに身体が軽くなるのを感じた。

それと同時に、ぬるりと瞼(まぶた)に濡れた感触を覚える。震える手で触れようとしたら、乱暴に手首をつかまれて止められた。

「っ……」

目の端にうつる物体がもぞもぞと動き、それがミゲールと分かってもテアは放心状態で見つめるだけだった。ミゲールはどろりとした黒い液体に包まれていた……それが血だということはすぐに分かった。

ミゲールは虫の息でもがいている。

鉄さびのような臭気が鼻に着き、テアは顔をそらした。

「行くぞ」

ぐいっと腰から引き上げられると、テアはあっという間に抱きかかえられた。

その時初めて、その人物の顔を表面からとらえた。

「……おう、さま……」

「余計な口をきくな。目を閉じろ」

テアは素直に目を閉じたが、セルジュが歩き出すとそっと薄眼を開けた。

扉が開かれ、暗い石造りの粗末な廊下をまっすぐと進む。ランプ

が照らす粗末な石造りの床を、ブーツの靴底がカツカツと無機質な音を立てていた。

上る階段の長さから、テアは自分が随分と地下深くに閉じ込められていたことを知った。外に出ると辺りはすっかり暗くなっていたため、周りの景色がまったく見えなかったが、それでも王宮の外であることはわかった。

「陛下」

暗がりから数人の兵士が現れた。

「ミゲールは処分した。後は任せる」

「かしこまりました」

事務的な短いやり取りのあと、兵士の中から初老の男が前に出た。どうやら医師らしく、男はテアの額から流れる血をぬぐうと傷の応急処置を始めた。

その間中、テアはセルジュの腕に抱かれたままだった。

テアは安心して意識を手放した。

目が覚めると王宮のベッドの上で、テアは安堵のため息をもらした。

――あんなに嫌がっていた場所なのに。

地下二階の粗末な部屋から一転、以前閉じこめられていた客室にテアはいた。美しく豪華な部屋だが、テアには悪い印象しかない……記憶にあるのは外へ出してもらえず、無理やり食事をとらされ、見張りの侍女たちの視線を感じる毎日だった。

逃げ出そうとすら思っていたのだ……この王宮から、そして国王の腕から。

しかしミゲールのおぞましい監禁室から助け出してくれた国王の腕の中は思いがけず安心できて、それがテアを混乱させた。

――恐ろしい王なのに。

「お目覚めですか」

「ロッシーヌさん……」

ベテランの女官ロッシーヌが部屋に現れ、穏やかな微笑をテアに向ける。

「すぐ陛下にお知らせします」

「え、待って下さい、そんなすぐに知らせなくっても……」

「目覚めたらすぐに知らせるよう、仰せつかっております」

有無を言わさぬロッシーヌの口調に、テアは沈んだ気持ちになった。

そう、ここはそういう場所だった……。

やがて廊下がさわがしくなり国王が現れた。

彼は付き添いの者たちに「外で待て」と言い渡して扉を閉め、ベッドで半身を起こすテアと向かい合った。

「……愚か者めが」

低い声で吐き捨てるようにつぶやくと、不機嫌そうに眉を寄せた。テアは内心びくつきながらも、視線をそらさないように頑張った。だがベッドの前まで来たセルジュのあまりにも怖い顔に、テアはとたんに身震いして視線を落としてしまう。

「おとなしくこの部屋にいれば、このようなことに巻き込まれずにすんだのだ」

「……でも」

――あなたが、私を部屋の外に出したんじゃない。地下の仕事場に押し込めて、一か月もほったらかしにしておいたんでしょ……。

そうテアは言いたかったが、口には出せなかった。

それというのも、おもむろにのばされた腕がテアの背中にまわり、荒々しく懐深く抱きしめられたからだ。

「……愚か者めが」

「いっ……いた……」

ギシギシと背中から締めつけられ、肩口に押しつけられた額がこすれて痛みが走る。そこはミゲールに殴られた場所で、今は包帯が巻かれていた。

「当分この部屋から出ることは許さん」

テアはなんと答えたらいいか分からず、身体をこわばらせたまま首を何度も横に振った。その態度をセルジュがどう受け止めたのか、

突然テアの身体を引きはがしてベッドに縫いつける。

「……ミゲールに、あの男に何をされた」

「……？」

「体を見せろ」

そう言うと、セルジュの大きな手がテアの首筋にあてられた。

それが下へと滑り、襟首をつかまれると一気に服を引きはがされる。

「や、やめて……！」

セルジュはテアの抵抗などものともせず、淡々と機械的に手を動かし続ける。そこで初めてテアは、自分がミゲールに陵辱されたかどうか疑われていることに気づいた。

「……何もなかったようだな」

テアは恥ずかしさとくやしさと、それからみじめさのごちゃまぜの気持ちで、思わず涙をこぼしてしまった。素肌に外気を感じ、自然と体が丸くなる。

セルジュは無言で細い肢体を一瞥すると、さっさと部屋を出ていってしまった。

その後しばらくの間、テアのすすり泣く声だけが室内に響いていた。

それから二日ほど、テアはベッドから出られなかった。
額の裂傷と全身打撲、それから鉄枷をつけられていた右足首をひねった際の捻挫など、予想以上にケガが多かったためだ。

三日目の朝、テアは初めて見る訪問者に目を丸くした。
それは全身甲冑で覆われた、一人の兵士だった。

「こちらはギルド将軍です」

ロッシーヌに紹介され、テアは目を丸くした。いったい将軍が自分に何の用だろうか、と。

「初めてお目にかかります、ギルドと申します。本日は国王陛下直々の命により参上しました」
「あの、それで……私になんの御用ですか？」
「この度はテア様の身辺警護を仰せつかわりました」
「身辺、警護？　なにそれ……」
「先日の一件より再びテア様の御身に危険が及ぶことがないよう、私の指揮の下、必要に応じて衛兵などを配備させていただきます」

そこでようやく、ギルドは伏せていた顔を上げた。髪の色が灰色だったので一見かなりの年配にも見えたが、顔を見るとまだそれほど年じゃないことがうかがえた。

「……王が随分とご心配されてましたよ」

将軍は口元に、やわらかい微笑を浮かべていた。微かにある目尻のしわが、彼の全体の雰囲気をやわらかくしている。

「今日はご挨拶に参りましたが、ご療養中にお騒がせして申し訳ございませんでした」

扉の閉まる音に、テアははっとしてかたわらのロッシーヌにふり返った。

「……今の人、王が心配してたって……」

「ええ、その通りですわ」

「だって、だって……王様は……」

――ちっとも、やさしくなくって。

テアは頭を振った。

すると額の傷がうずき、テアは思わず頭を抱えてうずくまる。

「テア様、いかがされましたか！？　誰か、医師を……」

「だ、大丈夫……少し、傷が痛んだだけ……」

「そのように急に動いてはなりません、また傷口が開いてしまいます」

「……傷口なら、一度開いているわ……」

先日、国王に乱暴に抱きしめられたテアは、ふさがりかけた額の傷口が開いてしまったことを知った。包帯から染み出た血が頬を濡らし、改めて医師に傷口を縫合してもらわなくてはならなかった。

額の傷は思いのほか酷かった。髪の生え際近くとはいえ結構な長さの傷口らしく、テアは頭の包帯がやけに大仰に巻かれている理由に納得した。

それなのに、国王は力任せにテアを抱きしめ……そのため傷口が

開いてしまったのだ。テアが額に手をあてたままうつむくと、ロッシーヌはテアの心境を読みとったかのように深くうなづいた。

「それは陛下が、テア様を強く思われている証拠ですわ……思いが強すぎて、お力を制御することがかなわないのでしょう」

「……」

「陛下は炎のように気性が激しく、また同時に氷のように冷酷な部分を合わせもつ方です。でも今まで一度たりとも、その力の加減を誤られたことなどございませんでした」

ロッシーヌは困ったような、しかし微かな微笑を浮かべていた。

「きっとテア様の前では、我を忘れてしまわれるのでしょう……こんな陛下は初めてです」

「そんな……」

「お気をつけてくださいませ、テア様。陛下のお気持ちを揺るがすのは他でもない、あなたなのですから。次、陛下がお怒りになられるような事をしたら、どうなるか分かりませんよ？」

テアはぞっとして身をすくませる。

「ですから今後一切、ここから逃げるなど毛頭考えないでくださいませ。テア様の身に何かありましたら、陛下は大変苦しまれますので……」

――もし逃げ出したら今度こそ……王様の手で殺されてしまうかもしれない。

まるで野生動物のように、飛びかかって喉笛を噛み切られてしまうのだろう……テアは絶望感に打ちひしがれた。

「私には、もう自由がないのね……」

ぽつり、とつぶやいたテアの言葉に、ロッシーヌからの返事はなかった。

（1）

テアがミゲールの屋敷より救出されてから早一週間が過ぎた。

傷も癒え、ようやくベランダに出ることを許されたテアだったが、ギルド将軍に指示された衛兵らによって常時厳重に警備されていて、テアは息がつまる思いで日々を過ごしていた。

「ケガ人の私がどうやって逃げ出せるというの？　いったい王様は何を考えているのかしら」

テアが不機嫌そうにつぶやくと、かたわらに控えていたロッシーヌが苦笑気味に小さな籠をさし出した。

「おひとつ召しあがってくださいな」

「……いらない」

色とりどりのきれいな紙にくるまれたお菓子は、とても魅力的に見えるのだが……テアは手を伸ばす気になれなかった。ロッシーヌは小さなため息をつく。

「陛下からの贈り物だから、ですか？」

「ちがうわ、動いてないからよ」

ロッシーヌは籠を抱えたままきょとんとした。

テアはちょっと顔を赤くすると、ためらいがちに口を開いた。

「ずっと部屋にこもりっぱなしだし、このままじゃ体がなまっちゃう。それなのにお菓子なんか食べたら病気になっちゃうわ」

「そういう意味でしたか」

ロッシーヌはおかしそうに笑った。

彼女は正直、目の前の少女の一体どこが国王をひきつけるのか疑問に思っていたが、こんな一面を見ると少しわかるような気がした。どこまでも素直で自然体のテアは、近くにいるだけでなごむ。ただ最近は物騒な事件があったため、警備の厳しい部屋の中で気がめいっているようだった。

少女の憂いた横顔に、ロッシーニもつい気の毒な気持ちになる。

「……陛下がテア様に護衛をつけられるのは、また何者かにさらわれないかご心配されているからですわ」

「でも……」

テアは手すりに所在無さげに置かれた自分の手を見下ろす。

護衛なのか、監視なのか、いずれにしてもテアにとっては同じことだ……ここから出られない、という意味では。

だがミゲールの一件でテアの心に生まれた新たな疑問が、たとえ可能でもここから去ることをためらわせた。

――サルージャは、あの手紙の内容を一体誰に伝えたかったのかしら？

ミゲールはあのまま死んでしまい、屋敷は近々取り壊されるという。テアが囚われていたあのおぞましい地下の監禁室もろとも、である。

あの時のことは思い出すだけで背筋が寒くなるし、取り壊される

ことに異存はない。ただサルージャが遺した手紙の行方が気になった。それからあの手紙がはさんであった本のことも……古代イトセリアの神話、サルージャが何度も読み返した本は？

「ねえ、あの屋敷はいつ取り壊されるの？」

「もう燃え落ちてしまいましたわ」

「えっ！？」

青ざめたテアに対し、ロッシーヌは落ち着いた様子でことのあらましを説明する。

「テア様が救出された翌日、陛下の命で屋敷には火をつけられました。罪人の住処は燃やされるのが普通です。この国ではよくあることですわ」

――それじゃあ、あの本も……手紙も燃えてしまったの！？

あの手紙は、もしかしたら今まで誰にも知りえなかった真実が隠されているかもしれなかったのだ。しかし、もうすでに無くなってしまったとは……テアは唇をかみしめた。

――でも、せめて本ならまだ読める……きっと同じ本が宮殿の蔵書にもあるはずだわ。それには王様に頼んでみるしかない。

「あの、ロッシーヌさん」

「はい、何でしょうか」

「そのう、王様にはどうやったら会えるのかしら……？」

テアが言いにくそうに口ごもると、ロッシーヌは目を丸くした。

「ご面会をご希望ならば、すぐに陛下にその旨お伝えしますわ」
「あっ、そのう……別に急がなくってもいいの。いえ、急ぐことは急ぐんだけど……」
「テア様が会いたがってらしたことを知れば、陛下はきっとお喜びになられますわ」

ロッシーヌの回答は、テアの心情から微妙にずれていた。テアはそういう意味で国王に会いたいわけではない。そしてテアはまだ国王が怖かった。

ともすればテアを殺しかねない、あの恐ろしい国王が……自分のことを本気で気にかけているとは、テアは到底思えなかった。それにはテアなりに考えた根拠があった。

――王様はきっと、私を利用したんだわ。

国王はきっと、ミゲールがサルージャを殺したことを知っている。それでもミゲールが今まで生きてこれたのは、きっと『罪』を着せられなかったからに違いない。つまりサルージャを殺したという確たる証拠をつかめなかったのだ。

そして今回テアを救出することに乗じ、国王はミゲールに復讐の刃を向けた。つまりテアは利用されたのだ……今回の救出劇はミゲールを殺すための口実に過ぎなかった、と。

――そこに、愛情なんか……あるわけない。

もしかしたらミゲールにテアを誘拐するよう、故意にしむけたのかもしれない。
そこまで考えてテアは嫌な気分になった。疑い始めるときりがな

い。

疑心暗鬼に陥るテアは、自分自身に対して嫌悪感を覚えた。いつからこんな、嫌な性格になってしまったのだろう……昔の自分はそうではなかった。あのテオドールの花を見つめていた無邪気な頃は……。

「テア様？」

「ううん……なんでもない」

テアの眼下では、警備の兵士が手にした鋭い槍の刃先が鈍く光っていた。

心の中に巣食う疑いの心を、あの切っ先で消し去って欲しい……そうしたら幸せだったあの頃に帰れるのではないか、とぼんやり思った。無邪気で、無知で、なにも心配などなかったあの頃に……。

（2）

国王は執務室で会議中だったらしく、テアとの面会は午後に持ちこされた。

もう日も暮れ始める頃、ようやく人気のない執務室に通されたテアは、窓を背にして座るセルジュと対峙することとなった。

「それで俺に何の用だ」

セルジュは顔も上げず、手にした書類に目を落としたままだ。いつものように冷たく厳しい顔つきだが、テアの目にはなんとなく疲れているように見えた。きっと激務が続いているのだろう……体を壊したりしないだろうか、とそこまで考えたテアは頭を振った。

――なんでこの人の心配なんて……そんなの絶対しない。

テアは意を決して、早く要件を済ませるべくおそるおそる切り出した。

「あのう、ミゲールの地下で……」

「言うな」

さえぎるように鋭く命令され、テアは言葉を断ち切られたまま後ろに一歩あとずさりした。セルジュの暗く、憤りに満ちたまなざしがテアを矢のように射る。

「あの男の名前は二度と口にするな」

「でも」

「これは命令だ」

「……」

なんとも奇妙だが、このときテアは国王がこわくなかった。強い視線を向けられ、きつい言葉を投げられても以前とはどこかちがうのだ。それは国王が変わったのか、それともテア自身の変化なのか……テアには分からなかった。テアは食い下がるように言葉を続けた。

「ある本を探しているんです」
「なんの本だ？　蔵書室には国中の本がひとそろいある」
「古代イトセリアの神話集です」

国王が眉をひそめた。なぜそんなものを、といった様子だ。

「あの地下室で見つけたんです……その、私が閉じこめられていた……」
「皆まで言わなくていい。ならば同じものを用意させ、あとで部屋へ届けておく。用はそれだけか」
「は、はい……」
「では今度は俺の番だ。ついてこい」

スラリと立ちあがったセルジュは、手にした書類を机に放り投げるとスタスタ扉へ向かった。テアは立ちすくんだままぼう然とその様子をながめていたが、扉に手をかけたまま振りかえったセルジュに「何をしている。ついてこい」と言われ、あわてて扉へ小走りに向かった。

「走るな、ゆっくり歩け」
「だって」
「また傷口が開いたらどうする」

セルジュの言葉は、テアには滑稽に響いた。そもそも一度はセルジュのせいで傷口が開いたのに、今さら過保護なことを言うからだ。

――変な王様。

思わず小さな笑いをもらしたテアに、セルジュは何も言わず、ただ無言でテアの赤銅色の髪をくしゃりとひとなでしたのだった。

「さあ、好きに選ぶがいい」

そうセルジュに言われ、テアはまばたきを繰り返した。

連れて行かれた大広間には、大勢の商人らがひしめきあうようにして待ち構えており、豪奢な衣装や髪飾り、めずらしい置物やお菓子にいたるまで、ところせましと並べられている。

「あの、これはいったい……」

「俺はお前の好みが分からない。だから好きに選べ」

そのときテアは、今朝ロッシーヌに差し出されたお菓子を思い出した。『食べたくない』と断ったとき、ロッシーヌが『陛下からの贈り物だからですか』と言っていた。

たしかに素直に受け取る気にはなれず、国王からの贈り物はすべて部屋に放置したまま手をつけていなかったのは事実だ。きっとそれが国王に報告されているのだろう。

――だって私はミゲールを罰するために、利用された駒だったのよ。

そしてミゲールは、テアにサルージャを重ねていた。つまりテア本人は誰も必要としてなかったのだ……そんな気持ちがテアの心を巣食っており、だから素直になんてなれっこないのだ。王が本心でテアを気にかけるなんて、そんなことありっこないのだ。

『きっと利用した罪悪感から、こんなことするのだわ』とテアは暗い気持ちで室内を埋め尽くすきらびやかな品物をながめた。

「お嬢様には、こちらの色がお似合いですわ」

テアがはっと気がつくと、すぐそばに人の良さそうな女の商人が薄絹を手にほほえんで立っている。すぐ隣のセルジュが「ではそれをもらおう」と事もなげに言う様子にテアは驚いて固まった。そんなテアに、セルジュは目を細める。

「どうした。なぜ選ぼうとしない」

「だって、何も欲しくありませんから……」

うつむかせたテアの横顔に、セルジュの唇がそっと寄せられる。

「お前が何も選ばないのなら、ここにいる役立たずの商人全員の首をはねてしまってもいいんだぞ」

「えっ……！？　ほ、本気じゃないですよね！？」

「さあ、どうする？」

悠然とした笑みを浮かべるセルジュに、テアは恐怖と怒りで青ざ

めた。

――大っきらいよ、王様なんて……！

今までにない強い感情が胸のうちに生まれる。半分ヤケになって品物を物色していると、ふいにテアの足元に小さなペンダントがコツリ、と落ちた。

「これはこれは、申し訳ありません」

床からペンダントを拾い上げたのは、頭にフードをかぶった細面の若い男性だった。少し浅黒い肌が、異国の人間だと示している。

「よろしかったら、こちらのペンダントはいかがでしょう」

「えっ、あの……」

――とにかく、なんでもいいから選ばないと！

「……じゃあ、それをいただきます」

「ありがとうございます」

それは深く青い石がついたペンダントだった。手渡されそうになったところを、横からセルジュの手がのびて奪われる。

「ふん、悪くないな」

「王様……」

「俺の目の色に似てなくもない……わざとか？」

ペンダントを手にしたセルジュに艶っぽい視線を向けられ、テアは真っ赤になった。

「偶然ですっ！」
「どうだか」

クスクスとめずらしく機嫌良さそうに笑うセルジュに、テアの鼓動が早くなった……セルジュの端正な横顔がびっくりするくらいやさしい表情になったからだ。

テアは平静さを装って再びペンダントに目を向けると、目の前でひざを折る商人が顔をあげた。どこかはしっこい目つきで、テアの顔色をうかがうように切り出した。

「こちらは『イトセリアの水』と呼ばれる石でございます」
「イトセリアの水？」
「はい『イトセリアの水』は、伝承によると古代イトセリアの王族のみが身に付けたそうです」

商人の説明にテアの瞳が大きくなった。

――またイトセリアだわ……なぜこんなにも、この話ばかり出てくるのかしら。

サルージャといい、あの本といい、そして宝石といい……イトセリアになにか縁があるような気がしてならない。

――とにかくあの本を読まなくちゃ。

イトセリアを調べることで、いろいろなことが分かるのかもしれない……テアは漠然とそう思った。

（3）

その夜、テアは寝室でベッドランプの灯りの下、古代イトセリアについて書かれた本を読みふけっていた。

イトセリアには文字が存在しなかったため、その歴史の大部分は謎につつまれている。言い伝えによって伝承された内容は、今では神話として受け継がれていた。

――イトセリアの水……これだわ。

テアはページを開いたまま腕組みをした。

そこには次のような話が書かれていた。

神から賜った『イトセリアの水』で地上の楽園を手に入れた民は、やがて豊かさが引き起こした欲望に果てに洪水を起こしてしまう。それが神の怒りを買い、『イセトリアの水』を神に取り上げられてしまうと、たちまち土地は枯れた。

干ばつと飢えに苦しむ民をあわれんだ神は、毎年ほんの一滴『イセトリアの水』をその国の王に与えることにした。王は神に感謝をささげ、それで花を育てた。やがて地上が赤い花で埋め尽くされると、国は豊かさを取り戻して平和が訪れた。

――『赤い花』か……テオドールみたいなのかしら。

テオドールの赤い花は観賞用ではなく、いろんな用途に使える。たとえば抽出したオイルは食用はもちろん、美容効果も高いので他国で高値で取引される。なぜかこの花はザールレック王国の土地で

しか栽培できず、よってこの国の代表的な特産物のひとつとしてあげられる。

――あれっ、ということは……もしかしてイトセリアって、今のザールレック王国ってこと？

テアはちらり、とベッドの横に置かれた文机へ目をやった。華奢な作りのそれは、片側に小さな引出しがひとつあって、その中に例の青い石のペンダントが入っている。

……取りだしてみると、それは本当に水の雫のようだった。

金の鎖を手に取り、振り子のようにゆらしてみる。テアの目の前に、水のゆらぎが月の光と相まって生き物のように見えた。

あとから知ったことだが、この宝石は大変な希少価値があるらしい……ロッシーヌからそのことを聞いて、テアは『失敗した』と悔やんだ。てきとうに安価な品物を選んでごまかすつもりだったのに、と。

「……それはそうやって遊ぶものではないだろう」

「きゃっ！？」

すぐ後ろから声がして、テアは文字通り飛び上がった。

国王の硬質な顔が、テアの手元を見下ろしている。いったいいつの間に部屋にきたのだろうか。

「つけてやる」

「え、あの……」

ペンダントを奪われ、そのまま首にかけられてしまう。ヒヤリとした鎖が、まるで拘束具のようで……テアは思わず顔をそむけた。

「……何かご用でしょうか」

テアの質問は無視したまま、セルジュはベッドへと向かうとガウンを脱ぎ始めた。薄いシャツの寝間着姿となったセルジュの様子を、テアは理解できずにぼんやりとながめてる。

「そんなところに突っ立ってないで、早く寝ろ」

シーツの間に身をすべらせたセルジュに、ようやくテアは我に返った。

「あ、じゃあ……私はどこで寝れば」

「何を言っている。ここがお前の寝室だろう」

「そうですけど……」

「グズグズするな」

のばされた手に腕を取られ、そのままベッドに引き込まれる。「じゃまだな」という言葉とともに、シーツの上に広げられたままだった本が床に放り投げられた。

「や、やだ……！」

「勘違いするな。ただ眠るだけだ」

あきれたような声音が頭上に落ち、テアは半泣きの顔をあげた。ほのかな月明りを浴びたセルジュの顔に一瞬だけ微かな笑みが浮かんだ。

「さっさと寝ろ。俺は疲れている」
「なっ……」

クルリと大きな背を向けられ、テアは絶句したままシーツを握りしめた。
どうやらセルジュは本気で同じベッドで寝るつもりらしい。

テアはなるたけセルジュから離れると、同じように背を向けてシーツにもぐりこんだ。セルジュの相変わらずの傲慢な態度にテアは腹が立ったが、やがて静粛に包まれた時間に流されるようにして眠りに落ちた。

「……異常は無いか」

闇に響く、低い声。
国王の手には長剣の柄が握られていた。

「今のところはございません」

別の声が、どこからともなく部屋に響く。

「何かあったらすぐに知らせろ」
「かしこまりました」

セルジュはかたわらで眠る少女を見下ろした。寝返りを打って、今はセルジュにその小さな顔をさらしている。

あどけない寝顔だ、とセルジュは思った。
指を髪にすべらせても起きようとしない。
再びシーツに身を沈めたセルジュは、ゆっくりとテアを引き寄せた。
やわらかく、あたたかい。
血の通った人間のぬくもりを感じる。
どこかに忘れてきた、思い出せない感覚だった。

（4）

「ピクニック？」
「ええ、王宮内ですが」

朝食の席で聞いたロッシーヌの言葉を、テアはにわかに信じられなかった。

「王宮の敷地内には小さな森があります。湖で水遊びもできますよ」
「それはうれしいけど……そのう、王様は」
「もちろん陛下もご一緒です」

やっぱり、とテアは肩を落とした。
最近どこへ行くにもセルジュがついてくるのだ……とはいっても城内でテアが行ける場所は限られているのだが、庭へ出るのすらひとりは許されていない。息がつまりそう、とはまさにこの状況だろう。

「たまには王様無しで、ってわけにはいかないの」
「テア様……そのようなこと陛下が耳にされたらどうなるか！」

めずらしくロッシーヌが焦ったようにテアをたしなめる。
テアは小さくため息をついた。

「だって、王様だってお忙しいのでしょ。私はどうせたくさんの人に監視されてるから逃げられっこないし、仮に私ががんばって逃げようとしても」
「不可能だな」

二人が同時にふり返った扉の前には、ドアにもたれて立つセルジュの姿があった。腕組みをして、面白そうに二人の様子を眺めている。

ロッシーヌはさっと立ち上がると「お茶の支度をしてまいりますわ」と下がってしまい、部屋にはテアとセルジュだけ残された。

「まだ逃げようなどと、くだらないことを考えているのかお前は」
「くだらなくなんかありません。逃げようなんて、無理だから考えていませんけど」

近づいてきたセルジュに腕をとられ、乱暴に立ち上がらせられたテアは顔をしかめた。あいかわらず扱いが手荒い。

「逃げようなんて考えてみろ。鎖につないでやる」

テアの青ざめた横顔に、セルジュの唇がそっとささやいた。
いつのまにか腰がからめとられ、ふたりの距離がぐっと近くなる。

「本当はピクニックなんぞにお前を連れていきたくないのだが、これは毎年恒例の行事ゆえ国内外からの賓客も訪れる。このタイミングで取りやめるわけにはいかない」
「じゃ、じゃあ私は宮殿に残ります……」

本当は外に出たいのだが、ここまで嫌がられるなら仕方がない。
うつむいたテアの顎を、長い指が押し上げた。

「人の出払った宮殿内に残しておくのはかえって危険だ。やむえないからお前も連れて行く」
「……」

テアは黙ってうなずくしかなかった。

その日の午後、ロッシーヌの先導でテアの部屋に現われたのは、城下町でも王族を顧客に扱う服飾店のお針子たちだった。なんでもピクニック用のドレスを仕立てるという。テアはおどろいて首を振った。

「ドレスなら、まだ袖すら通してないのがクローゼットに何着もあるわ」

「あのドレスはあくまで普段着用です。日中の外へお出かけになるのですから、ドレスに合わせて帽子や手袋もしつらえなくてはなりません」

あれこれ体のサイズを測られながら、テアはあきれて反論する気も失せていた。

手袋だって帽子だって、いつ使われるかわからないままごっそりとクローゼットに眠っているのだ……まったくどうしてこんな無駄なことをするのだろうか。

生地を選ぶ段階になって、提案された織物とレースを前にテアは眉をひそめた。

「白ばっかりじゃない……白なんてすぐに汚れてしまうわ」

「陛下は白を基調にしたドレスをご所望でしたので」

襟やそでにあしらうレースは繊細で、ともすれば小枝にすぐ引っかけてしまいそうだ。
こんなもの着たら、いくら外でもおとなしくしないわけにはいかない。

「水遊びなんて、夢のまた夢だわ……」

ロッシーヌは苦笑するしかなかった。
おそらくテアの考えは正しい……国王はテアをなるたけそばに置いておきたいのだろう。そのためには少々仰々しいドレスを着せれば、動きづらくなるから行動も制限できる。

「陛下は賓客とのごあいさつがありますし、なにぶん外ですのであまり席を立つことが敵わないのですわ。だからテア様には、なるたけおそばにいて欲しいのでしょう」
「ホント、王様って『王様』よね」

口をとがらすテアだったが、本当はほんの少しだけセルジュを気の毒に思っていた。どこへ行っても自由のない国王は、なんだか見えない鎖につながれているようだ。

――あれ、でも……初めて会ったとき、たしかお忍び帰りだったな。

初めてセルジュと出会ったのは、テオドールの花畑の中。
朝日の中で見たその姿は、まるで彫刻のように整った造形で、青く輝く髪が風にたなびいて目を奪われたものだ。

そのセルジュが、どこかの女性……おそらく身分の高い……と、親密な時を過ごしていた。

そばにいた伯母も言っていた「きっとお忍びの帰りだよ」という言葉が思い出され、どうしてかテアの胸はきしり、と痛んだ。

――もしかして、ピクニックにはその女の人も来るのかしら。

テアは落ち着かない気持ちになった。

（5）

新緑の香りが鼻腔をくすぐる。
おだやかな風が体を包むようにかけぬけ、テアはほおっと肩の力が抜けるのを感じた。

想像以上に仰々しい人数のピクニックとなったが、それでも自然の清々しさは損なわれてなかった。湖の水面がきらめき、岸辺には色とりどりの花のような女性のドレスが翻っていた。それすらも自然になじみ、溶け込んでいた。

「きれい……」

テアの口から思わず出た言葉に、傍らのセルジュがめずらしく穏やかな微笑を浮かべた……とはいってもほんの一時、しかも口もとだけなのでテアすら気づかないほどだったが。

テアは件の白いドレスを着ていた。
やわらかなレースのすそが足元の草をギリギリ、撫でるか撫でないかのところで波打つ。同色の帽子は淡いブルーのリボンで顎下に結びつけられ、湖を照りつける日差しをよけると同時に、テアの顔も半分ほど隠していた。

「テア様、お飲み物をどうぞ」

ロッシーヌから差し出されたのは、甘い花の香りがする冷たいお茶だった。

「空気が乾燥していますし、この日射しです。気をつけないと熱中

症になるかもしれません」
「たしかに少し暑いかな……このショール外してもいい？」
そういってテアはさっさと上着代わりのショールを肩から取ると、なぜか隣に立つセルジュに押し付けた。
「おい……」
「だってそれ、王様の『ご所望の服』でしょ？」
クスクス笑いながら走り去るテアの後ろ姿を、セルジュは目を細めて見つめた。
その横ではロッシーヌがおだやかに微笑んでいた。

飲み物や食べ物は際限なく振る舞われ、誰もが思い思いの場所でのんびりとくつろいでいる。
テアはドレスを小枝に引っかけないよう、最新の注意をはらって木々の間を練り歩いていた。
セルジュは奥まったテントの一角で、賓客と挨拶をしていた。
テアは隣にいてもしょうがないし、好奇の目にさらされるのは気分が良くない……そんな思いが伝わったのだろうか、テントをそっと離れたことに気づいてるはずのセルジュは引きとめようとはしなかった。
テアは木々の間をすり抜けるようにして、久しぶりに味わう『一人歩き』を堪能していた。

そんなテアの道行く先に、人影が現れた。

「こんにちは、お嬢さん」

「……？　こんにちは……」

声を掛けてきたのは、テアと同じぐらいの年頃の若い娘だった。黒髪を後ろにまとめ、知的な緑の目が好奇心に輝いている。背はテアが少し見上げるくらいの高さだ。

「あなた、セルジュの新しい恋人？」

「っ……！　違います！」

キッパリ否定したテアに、若い娘は吹き出した。体をふたつに折り曲げ、声を殺して笑っている。

「ごめんなさい、あんまりはっきり言うものだから」

「だって、本当のことだもの」

「そう、私の勘違いか。セルジュさいきん来なくなったから……つい、ね」

最後の言葉に、テアはぎくりと身を固まらせた。

――もしかして、この人……王様の恋人？

「私、カナリーっていうの。よろしくね」

カナリーは笑いながらテアに手を差し伸べた。その笑顔に影は無い。

「誤解しないでね、私の恋人はセルジュじゃないわ」

奇妙な沈黙のあと、カナリーはそっと内緒話のように声をひそめた。

「サルージャよ」

「え……」

「私の恋人」

テアはびっくりして思わず後ずさる。

カナリーはそんなテアを、まるで観察するかのようにじっと見つめた。

「じゃあね、セルジュの可愛い人」

「あ、あの……？」

木々の間に滑り込むようにして、カナリーの後ろ姿が見えなくなる。

よくみると、テアはピクニックの場所から少々離れた森の入口まで来てしまったようだ。

「テア様、こちらでしたか」

テア付きの侍女のひとりがやってきて「お風邪を召しますわ」とショールを肩にかけた。テアはされるままにぼんやりとカナリーの立ち去った方向を見つめていた。

「テア様？」

「あ……ううん、なんでも無いの」

「さあ、こちらへ」

そのままぼんやりと、手を引かれるままにテアは歩き出した。
――あの人、サルージャの恋人……？　サルージャの……。
おかしな話ではない。セルジュだって通う女性のひとりやふたりいたのだ。その兄に恋人くらいいたって不思議な話ではない。
しかしあの明るさ、清々しさはなんだろう？
緑の瞳は楽しげで、穏やかで、ちっとも……悲しそうに見えない。
そう、悲しそうに見えないのだ。
サルージャは非業の死を遂げたのに、なぜだろう？
もう悲しみを乗り越えたのか？
――それとも、サルージャは……
そこで思考は打ち切られた。
突然、風の音が強くなったのだ。
「えっ……？」
視界はいつの間にか開けていた。
足元に視線を落とすと、決して浅くない谷間に流れる川が轟々と勢いよく流れている。
そして次の瞬間……テアの背中に衝撃が走った。
「！？」

テアの体はそのまま、谷間に吸い込まれていった。

(1)

暗闇の中に、小さな灯りがともった。

ゆっくりと双眸を開いたテアは、不思議なほど落ち着いていた。おだやかな闇に包まれた、簡素だが厳粛さを感じさせる内装の部屋のせいかもしれない。

高い天蓋付きのベッドは、大きなサイズに見合うだけの威圧感がある。だが嫌な感じはしない。

灰色というより無色と呼びたくなる無機質な床と壁は、粘土の溶けたようなシーツの色と相まって不思議な統一感をかもしだしていた。

一方の壁際から人影がゆらいだ。

テアは目をこらして近づいてきた人物を見つめる。

「……体のどこか、痛みますか」

か細い女性の声だった。頭をふわりと包むベールさえ無色のせいか、そこからのぞく大きな黒目がちの瞳が目立っている。

女性はやさしく、包みこむような眼差しをテアに向けた。

テアがそっと首を振ると、女性は安堵のため息をもらす。

「薬がうまく効いているのね。よかった……」

「薬？」

「ええ。私が作った痛み止めの薬。全身打撲だったの。でも大きなケガはなかった。小さな傷はすべてふさいだし、大丈夫」

不思議な話し方をする人だとテアは思った。
そして女性の物腰から、見かけよりもずっと年上と思われた。しかしきれいな卵型の顔はシワひとつなく、差し出された細い指はすらりときれいだった。なにより女性からは懐かしい、ポプリのような良い香りがした。

「ここはどこですか」

テアはなんとなく、なぜ自分がここにいるのか、今この女性にきいてはならない気がした。警戒心からではない。ただこの部屋を取り巻く静けさが、自分にはもう少し必要だと思われたからだ。

きいてしまったら最後……なにか魔法のようなものが解けてしまう気がしたのだ。

「ここは森の外れにある神殿の地下です。あなたは二日前に、ここに運ばれてきたの」
「そう、なんですか……」
「そしてあなたは、今日ここを出なくてはならない」

その言葉に、テアは目を大きくさせただけに留まった。
女性はゆっくりと後ろをふり返ると、暗がりに向かって声をかけた。

「準備は整いましたか」
「……はい、いつでも出発できます」

暗闇から返ってきたのは、低い男性の声だった。

「では、時間になったら声をかけてください。それまでこの方とお話しています」

消え入りそうな返事をうけ、女性は再びテアに向き直る。

「あなたはここから逃げてください」

「逃げる？」

――どこへ……そして、誰から？

「あの国からです。このままでは、あなたは利用されてしまいます。それはあの方の本意ではない」

「あの方って……」

「セルジュ王です」

テアは息を飲んだ。

体が震えだした。

「つらい思いをしたのですか」

女性の言葉に、テアは首を振った。

強引な手……でもテアの伸ばした手は拒む。

『……さわるな、これは穢れた血だ』

強い光を宿した瞳……でもその奥に見えるのは暗い影。

『……心がある無いなぞ、どうでもいいことだ。そんなこと最初から期待してない』

背を向けると、まるで世界のなにもかも拒絶しているようで。

少しだけ足早に歩く靴音は、まるで世界をひとりきりで歩いているようで。
皮肉な微笑は、まるで何かをあきらめているようで。
どうしてなのか……テアはセルジュを思うと、胸が痛む。
「つらい思いなのか……分かりません。たしかに苦しいとき、悲しいときがあったんです。でも私、あの人のそばにいて本当につらかったのか分からないんです」
女性はしばらく無言でいたが、やがて黒い瞳を伏せた。
白い横顔が、ほのかな灯りにやわらかくにじむ。
「王族の方々は……その生まれというだけで、さまざまな事情を抱えてる。自分らしくふるまうことが、とてもかなわないのかもしれません」
「自分らしく、ですか」
「ええ。うれしいときに笑い、悲しいときに涙を流す……そんな単純なことも、許せないのでしょう」
「誰が許せないのですか？　まわりの人が？　王様は強くなくちゃいけないから？　でも王様だって心を許すひとの前だったら……うう、一人でいるときならば、自分の感情を出したって構わないのでしょう！？」
女性は静かに首を振った。
「いいえ。一人でいても無理です」
「でもっ……」
「許さないのは他でもない、ご自身なのですから」

テアは言葉を失った。

「自分から逃れることなど誰もできない。最後まで自分を見届けるのは、他ならぬ自分……」

呪文のような言葉が、テアの体にしみわたる。

女性の指先がテアの肩に触れた。どこかなぐさめるような仕草に、テアの涙腺が決壊した。どうしようもなく悲しくなったのだ。

「……カリン様、そろそろお時間です」

暗闇から声が響いた。

女性……カリンは闇へ向かって声をかけた。

「わかりました……よろしくお願いします」

テアが涙でぬれた目をこすりつつ顔をあげると、そこには……フードをかぶった細面の若い男の姿があった。

「『イトセリアの水』は気に入っていただけましたか、お嬢さん？」

「あ……あなたは！」

異国の顔立ちをしたその男は、先日城に招かれた商人たちの一人。他でもない、テアに『イトセリアの水』と呼ばれる青い石を手渡した宝石商だった。

(2)

「あ、あなた……」

青年がフードを取ると、ゆるく束ねられた鮮やかな金色の髪が目を引く。

「僕はネイ、砂漠の民です。あなたの旅をお供します」

ネイの少し斜に構えた表情に、テアは不安な気持ちでカリンを仰ぎ見る。カリンは小さくため息をつくと、たしなめるような視線をネイに向けた。

「ネイ……わかっているのでしょうね？」

「この子を無事トルドまで送り届ければ良いのでしょう。殺さず、傷つけずにね」

「それは体だけじゃなく、心も、という意味ですよ」

カリンの静かな口調に、ネイは「はいはい」と面倒そうに相づちを打った。テアは彼らの会話から、この場所を離れなくてはならないことを悟った。それもこの、どこか突き離すような態度を取る異国の青年と二人で……。

「ほらごらんなさい。この方にこのような顔をさせてはだめ。もし約束を守れないなら、もう私のもとに戻ってくるのはゆるさない」

「わわ、ごめんなさいカリン様！　大丈夫、ちゃんとしますよ……ただこの子があまりにも分かっていなさそうだから、ちょっといらついただけです。セルジュ様にもよくよく言われてるし、ちゃんとやってきますよ」

ネイは再びフードをかぶりなおすと、なかばぼう然とベッドに座ったままのテアの顔をのぞきこんだ。茶色い瞳が面白そうに細められる。

「僕はね、セルジュ様に頼まれて毎晩君の護衛をしてたんですよ。さすがに十日も夜更かしが続くと、いくら昼間寝てても体がきつくってね」

「護衛って……」

「ほら、君は何も知らない。セルジュ様は君を守るため、ありとあらゆる手を尽くされていたんですよ。そのペンダントだって……」

「……ネイ、いいかげんにしなさい」

カリンの声は小さかったが、ネイの口を閉ざすのには効果絶大だった。

テアは震える手で、首につけられた青い石『イセトリアの水』をにぎりしめる。

――いったいどういうこと？　なんで王様が私を守るの？　誰から？

思えば城内でも、不自然なほどテアの身辺は厳重に警備されていた。テアはてっきり自分が逃げ出すことを懸念したセルジュの、ちょっと行き過ぎた行為だと思っていた。

城の厨房に送られたときだって、毎晩呼び出されていたため一人きりにされたことはなかった。奇妙な香が焚かれた部屋へ案内され、ただしびれるように動けなくなり、そのまま深い眠りについていた……セルジュはその間、なにか話しかけていたように思う。

「……もう香の効能は切れたかしら」

カリンの言葉に、テアはハッとした。

自分の心の中をのぞかれたなように思えたのだ。

「古い魔法のひとつなの。体の疲れを取り、回復力を高める……もう歩けそう？」

「わ、分かりません……」

テアはそおっと足を床に下ろし、ゆっくりと立ちあがった。

素足の指先が磨かれた石の床の冷たい温度を吸い取っていく。

「あ、ごめんなさい、ネイが用意したこの靴を履いて。それから服も着替えた方がいいわね」

テアは指先が次第に麻痺していくのをただただ、じっと感じていた。

テアの準備が整ったころには、空がすでに白みかけていた。

地下から長い階段と廊下を通って地上に出た時、テアはいよいよ不安になった。神殿の周囲は木々が生い茂り、まだ深い森の中であることを物語っていた。

「ネイのこと悪く思わないでね。思ったことをなんでも口にしてしまうの」

カリンはテアを勇気づけるように微笑んだ。
「最後にききたいことはある？」
「……」
テアはうつむいた。まだ何も、聞いていないのだ。
どこからどう、切り出していいのか分からなかった。
「まだ時がきてないのね……追々ネイから聞けばいい。彼は真実だけ口にする」
カリンの瞳が、ネイの視線を捕えた。
ネイが神妙にうなづき、それからかたわらの馬に飛び乗る。
「さあ、行きましょう。僕の手を取って」
ネイの差し出す手を取ったテアの体は、宙にふわりと浮いた。
まるで見えない力に押し上げられたように、テアの体はゆっくりと馬上に落ち着いた。
カリンはその様子をじっと見守っており、テアと目が合うと小さく微笑んだ。テアの不安を理解するような眼差しに、テアの心はほんの少しだけなぐさめられる。
「『音消し』は有効ですか」
「もちろん。じゃあカリン様、いってまいります」
馬が駆け出した……『音消し』という聞き慣れない単語を、テアは間もなく理解する。

彼らの走る馬のひづめも、顔を切る風の音も、それから自分が発する言葉も……何もかも聞こえなくなったからだ。

二人が向かうのは、砂漠の町トルド。

この大陸には砂漠は存在しない……つまり海を越えるのだ。

――港……港へ向かっているのね。

目の前に飛んできた木の葉が、テア達をよけるように吹き飛んでいく。

まるで空気の塊に包まれているかのように、馬上の二人は影となって深い森を雷光のように突き進んでいったのだった。

（3）

港町フェイの朝は早い。
朝一で水揚げされた海産物が漁港の市場に並び、威勢の良い掛け声が飛び交う中たくさんの買い物客でごった返していた。

「すごい人……」
「そう、だからはぐれないようにしてくださいね。馬は乗り捨てちゃうから、ここからは徒歩ですよ」

ネイは町の入り口で馬を放すと、くすんだ生成りの布をテアの頭に手際良く巻きつける。

「君の赤い髪はけっこう目立つから、この布でかくさなくちゃ……さあこれでいい。じゃあ僕についてきてください」

テアはだまってネイの後に続く。
潮の香りを含んだ風が、立ち並ぶ店のテントを波立たせている。

活気のある市場の横には、これまた賑やかな青果市場があった。
魚介類に、野菜や果物の香りがごちゃまぜなのに不思議と嫌悪感がわかないのは、すべて鮮度が高いからだろうか。

テアとネイは市場に続く大通りの一角にある食堂で、少し早目の朝食を取ることにした。
店内は香ばしく焼ける魚の香りがただよい、あまり食欲のなかったテアの胃袋をいたく刺激した。しかし……。

「あれ、それ嫌いですか？」

魚の燻製を焼いたものを前に、テアは手を止めたままぼんやりとしていた。ネイの顔を見て我に返ったようだが、食べる早さはあまり変わらなかった。

「これから先長いんだし、ちゃんと食べないともちませんよ。他に食べたいものがあるなら注文します？」

「あ、いえ……これでいいです。おいしいし」

「それにしちゃ、あまりすすんでないですね」

テアは苦笑してフォークを置いた。

「緊張してるんです。この大陸を離れるのは、ましてや船に乗るのは初めてだから」

「ああ、なるほど。大丈夫、すぐに慣れますよ」

それ以上ネイも追及してこないので、二人はだまって食事を再開した。しかしテアの心は別のことが引っかかっていた。

――このまま離れてもいいのかしら。

神殿で出会ったカリンも、目の前にいるこのネイも、国王の命を受けて動いているようだ。だから国王はテアがこうして砂漠へ向けて旅立とうとしていることも知っているはず。

――でも……本当にこのまま行ってしまっていいのかしら。

気持ちが同じところをグルグルと回っている、そんなテアの意識を無理やり外に向けたのは店の奥から聞こえてきた声だった。

「なんだって、またかい！？　これで今月に入って三度目だろう！」
ふり向くと中年のいかつい男が、カウンター越しに身を乗り出す店主の女将に向かって首を振っている。
「あの連中ときたら、わざわざあいつらの神経を逆なでるような航路ばっか選びやがるからなぁ……」
「そんで、むざむざあいつら海賊の餌食になってんじゃ話になんないねぇ」
――海賊！？
「さ、そろそろ出ましょうか」
テアははっとして、それからネイに続いて席を立つ。
店の外に出ると、ネイはクスクスと笑いだした。
「さいきん海の治安は荒れてるようですね……兵士が出張る前に、僕らもさっさと港を離れたほうがよさそうですね」
「それで、船はいつ出航するの？」
テアの質問に、ネイは「んー」とのびをした。
「今夜遅くになりそうですから、少し昼寝でもしときましょうか……宿はこっちですよ」

日もすでに沈んだ夜半、港町は翌朝の準備に向けてすでに店じまいをしていた。
テアとネイは宿屋でしばらく仮眠を取った後、夜の港へ向かってあわただしく出発することになった。

「灯りがないから、足元気をつけてください」

ネイは隣のテアにささやくと、市場の一角を外れ暗がりへと歩を進めていく。テアは不安げに後ろを振り返りながら、それでもネイを信じてついて行くしかない。

――まだ出会って一日も経ってないのに、信じなくちゃ先に進めないなんて……。

でも選択肢が他に無いのだ。いや、あるとすれば……王宮に帰ること。しかしそれはテアの望んでいた道ではない気がした。

――ちがう。『私が』じゃなく『王様が』望んでないんだわ……。

その考えに、テアはなぜだかショックを受けた。あれほど嫌だった王宮なのに、どうしてそんな気持ちになるのか理解できなかった。

「着きましたよ」
「え……洞窟？」
「この奥に小舟があるんです」

市場の裏手にある岬には岩で覆われた洞窟があり、二人は波打ち際をつたって奥へと進む。そこでようやく灯りがともされ、ほっとしたのもつかの間……テアは驚きに息を飲んだ。

「そ、それはなに！？」
「え？」
「その火……手のひらの」
ネイの手のひらで小さな火の玉が浮かんでいた。
「古い魔法のひとつですよ。明り取りに便利でね」
「魔法……」
テアは呆けたように立ち止ったが、ネイに急かされて再び歩き出す。水が引きいれられた洞窟の奥には浅瀬があり、一隻の小舟がポツンと置かれていた。
「さ、これに乗ってください」
ネイはテアを小舟へ乗せると、船の後ろを足で押してから自分もそれに飛び乗った。長い棒で舵を切るネイをテアはあせったように見上げた。
「あの、あの……まさかこの船で？」
「まさか。沖合にもっと大きな船が待ってるんですよ」
その言葉にテアはとりあえず胸を撫で下ろしたが、船が暗い波間を突き進んで行くにつれ再び不安がふくらんでいく。
――普通の客船じゃないの？　どうしてこんな風にこっそり乗らなくちゃならないのかしら？
やがて黒い影のような壁が見えた。
どうやらそれは船体の一部らしく、目的の船にたどりついたよう

だ。その壁に寄りそうようにネイが小舟を寄せると、すぐさま上方から縄ばしごが降ってきた。

「先にのぼって」

「え、で、でも……」

「早く。グズグズしていると気の短い船長にどなられますよ」

ネイの言葉に、テアはあわてて縄ばしごに手を伸ばした。

なんとか上りきると、マストの元に数人の人影が見えた。その一人が前に進み出る。

「おそかったな……もう少しで置いてっちまうとこだったぜ」

腹の底に響くような声に、テアは無意識に体を震わせる……どうしてだかこの男からは危険な香りがした。

いつの間にかテアの隣に立ったネイが男に向かっててていねいにおじぎをしたので、テアも同じように頭を下げた。

「こんばんは、セラーノ船長。この度はごやっかいになります」

「ふん……あの娘は元気か？」

「カリン様ならご健勝ですよ」

月明りの下、ワシのように鋭い眼光を持つ男の顔がニヤリと笑った。

（4）

「で、その娘が『イトセリアの水』か。なるほど、その赤毛はここらではめずらしいな……もっとも北の大陸の端へ行けば見かけねえこともないが」

セラーノ船長、と呼ばれた背の高い男はおもしろそうにテアをジロジロとながめている。貴族が好みそうな金ボタンや刺繍のついた長い上着を着ているが粗野な雰囲気をかもしだしており、特に長い黒髪に無精ひげがそれに拍車をかけていた。

「ま、うちに乗ってる限り他所の連中に手出しはさせねえよ。トルドに一番近い港で降ろしてやる。もっとも無法地帯の港だから、その先の責任は負えねえけどよ」

「十分です、ありがとうございます。カリン様からもよろしくと……あれ？」

ネイは言葉を切った。

セラーノの顔は洞窟から突き出た岬の先端に向けられている。

「ふん……やっぱり来てたか」

ネイとカリンが船長の視線の先を追うと、そこには……黒いマントをまとった人影があった。

――王様！？

外されたフードからのぞく青い髪が風に舞う。

精悍な顔がまっすぐテアたちに向けられた。

「え～まさか迎えにきちゃった？」
「ちがうわ」
ネイの言葉を、テアは即座に否定した。
甲板から身を乗り出すと、潮風に解かれた赤い髪がまるで闇を照らすかがり火のように宙にたなびいた。
テアはともすれば泣きだしそうな自分を叱咤し、代わりに腕を精一杯のばすと岬に向けて大きく手を振った。テアは分かっていた……セルジュは迎えになんてきたのではないことを。
――見送りにきてくれたんだ……私が迷いを無くすように。
セルジュの表情ははっきり見えない。だがテアにはなんとなく、いつにない微笑を浮かべてるような気がした。それは儚い光景だった……闇があっという間にセルジュの顔を隠してしまい、残されたシルエットだけが彼の存在を示したから。
『テア』
月が隠れる刹那、セルジュの口がそう動いたのをテアは見た気がした。
別れの涙なんて、流さないと思ってた。それなのに……テアは頬を濡らしながら、ただただ無言で手を振り続けた。
「ったく、威嚇しやがって……あいかわらず、ふてぶてしい野郎だ」
セラーノは人を食ったような目つきで顎をしゃくると、靴底で船

の縁を蹴りあげるように足を乗せる。
「あれは所有者の目だ。なあ嬢ちゃん、お前がどこへ行こうとあいつから逃げられやしねえよ」
テアは鼻をぐしっとすすりあげると、のろのろと粗野な船長の顔を見上げた。
「だからそんな、捨て犬みてえな顔すんな」
テアの顔に、ゆっくりと安堵の微笑みが広がった。そんな彼女の様子をネイは不思議そうに見つめていた。
「さて、とりあえず寝場所だな……シャス！」
セラーノの呼びかけに、マストの暗がりからスラリとした青年が進み出た。
長い銀髪を無造作に垂らし、整ってはいるがキツイ目つきをしている。
「赤毛の嬢ちゃん、お前はコイツと寝ろ」
「ええっ！？」
「文句言うんじゃねえ。他の連中と大部屋で雑魚寝するよかマシだろーが」
「で、でも……」
船長は「ああそうだ」と今さら気づいたように付け加えた。
「ちなみにコイツ、女だから」

お世辞にも広いと言えない船室には、これまた小さいシングルベッドがひとつだけ置かれていた。

「奥に行け」

シャスのそっけない口調とアイスブルーの視線にどきまきしつつ、テアはそろそろとベッドにもぐりこんだ。

「消すぞ」

灯りを落とされ、ひとつしかない小さな丸窓から薄くこぼれる月明りだけが室内を青白く照らした。

「あの……」

「なんだ」

「すいません、ベッド半分取っちゃって……あの、それから私……」

テアの消え入りそうな声が、シャスののばされた手によってさえぎられた。そっと肩をたたかれる。

「寝ろ。話は明日だ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8719v/

赤い花

2012年1月13日22時29分発行